2024 年度

九州共立大学

地域連携推進センター報告書

令和 7 年 7 月

地域連携推進センター

令和６年度　九州共立大学　地域連携推進センター報告書
発刊に寄せて

地域連携推進センター　所長
山　田　　明

本学との包括的地域連携協定先である各自治体及び諸団体の皆様、地域社会でお世話になっている関係者の皆様には、日頃より地域連携推進センターの活動に御理解と御協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

地域社会の在り方が社会的課題としてテーマになった事例として、福井県知事であった西川一誠氏が、その著書『ふるさとの発想』（2009）でつながりの再生を語り、新たな地域創生として「新しいふるさと」を提唱したことが挙げられます。現在、一般的になった関係人口（特定の地域で継続的に多様な形態でつながる人）もその一つです。15年以上たった今、地域社会の衰退は消滅自治体の現実も目に見えるところにきています。一方では、新たにウエルビーイング（社会的にも幸せに生きる）の実現も唱えられ始めており、まさに地域社会の存続が喫緊の課題となっているのです。対策の一つとして、社会関係資本に注目が集まってきました。つながること自体が個人の資産であり、地域社会の資源（社会関係資本）となります。基本は、地域社会における信頼・規範・ネットワークです。社会教育を基盤とした「人づくり、つながりづくり、地域づくり」の循環が、地域社会における個人と地域全体のウエルビーイングの向上をもたらすことに期待がかかります。

以上のような社会のニーズを受け山積する課題を改善するためには、自治体をはじめ地域活動の中核を担っている多様な分野の組織、団体、地域住民の連携・協働が必要不可欠です。すなわち地域総ぐるみで総合的につながり合うことが必要となるのです。その意味で本学が推進する包括的地域連携協定に基づく地域連携事業プランは、多様な主体がそれぞれの立場から主体的に取り組みつつ、必要に応じてつながり合うことで地域課題の解決に多大な貢献をしています。

ここに令和６年度の実施報告書を発刊致します。報告書は包括的地域連携協定に基づく活動の成果をまとめたものです。これからも協定先との連携・協働を通じて活動内容をより充実させ、「人づくり・つながりづくり・地域づくり」の構築を目指した活動を継続的に展開していきたいと考えています。

本学は地域社会と共に歩む大学の実現と学生の人材育成に重点を置き、学是である「自律処行（自らの良心に従い、事に処し善を行う）」の具現化を目指しています。この基本方針に沿って地域連携推進センターでは、地域社会のニーズに基づく先進的な地域連携システム（九州共立大学モデル）を構築し、「地域の皆様と共に」をモットーに、オープンな存在としてその機能を提供して参ります。皆様方のご協力をお願い申し上げます。

地域連携推進センターについて

○目的

平成６（1994）年に設置した「生涯学習研究センター」は、地域における生涯学習社会の実現を図ることを目的とし、大学を地域社会に開放する際の触媒的な機能として、ここを拠点とした社会人や地域住民並びに学生に対する多様な学習の提供と、生涯学習に関する研究の推進を展開してきたところであるが、近年、「地方創生」が声高に叫ばれるなか、大学にあっては「地域連携・地域貢献」の拠点（中核）となることがこれまで以上に強く求められており、大学全体で組織化された地域との連携協働体制の構築が喫緊の課題となっている。

このことから、本学においては上述の「生涯学習研究センター」の機能を核とし、産業界等との研究協力及び学術交流の推進を目的として設置した「総合研究所」、ならびに大学が行う地域連携活動に係る学内情報の一元管理と対外的な窓口業務や連絡調整を行う「地域連携推進室」の三つの組織を統合した「地域連携推進センター」を設置し、大学の知識・人材を活用した「地域連携・貢献」「研究推進」「生涯学習」の各事業を一体的に行うことにより、地域の活性化及び人材育成の一翼を担うことで「地域に開かれた大学」の定着を目的とする。

○業務内容

(1) ３部門が行う事業への助言・管理・運営補助

①地域連携部門

・協定締結機関及び協力機関との事業プランに関する調整及び学内機関とのマッチング

・地域連携事業プランに関する進捗状況の把握・管理

・その他、地域連携に関する事項

②生涯学習・資格取得支援部門

・公開講座・シンポジウム等の企画立案

・その他、生涯学習・資格取得支援に関する事項

③研究推進部門

・自治体、企業、他大学等との地域連携に関する共同研究の受入窓口及び学内教員とのマッチング

・研究紀要の発行

・その他、地域連携に関する学内の研究推進に関する事項

(2)「地域連携推進センター運営委員会」「地域連携協議会」「地域連携推進事業評価委員会」の運営・管理

(3)協定締結の審議及び締結事務

(4)「地域貢献・連携事業」報告書（年報を含む）・地域連携推進センター研究紀要の発行

(5)その他、地域連携推進センターの運営に関する事項

○地域連携推進センター運営委員会

委 員 長：地域連携推進センター所長

副委員長：地域連携推進センター副所長

委　　員：各学部から学長が推薦する教育職員　各１名

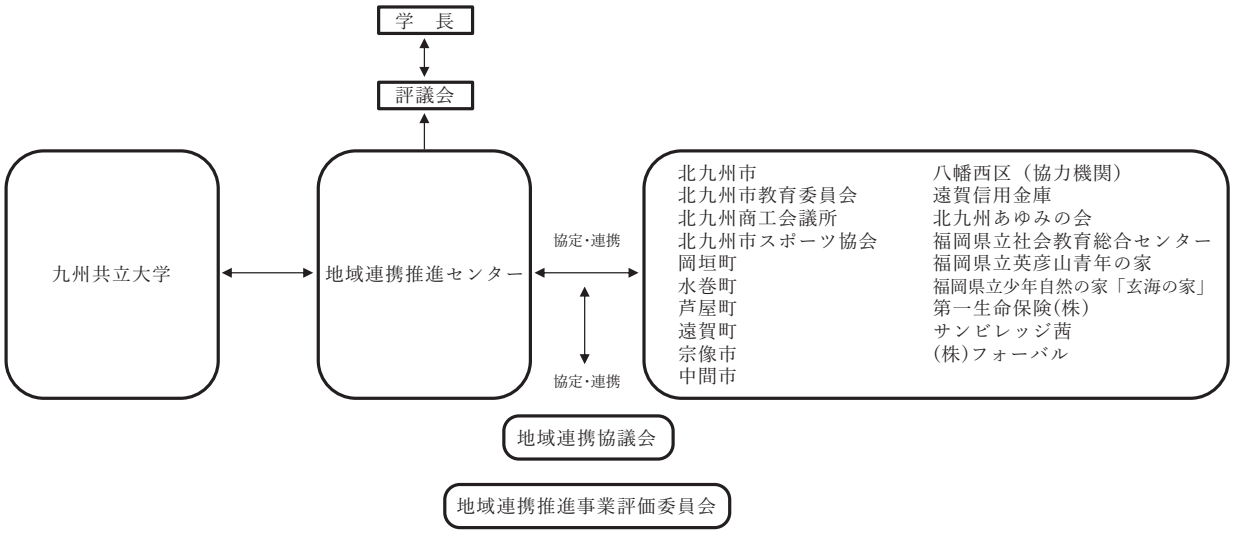
教務課長

キャリア支援課長

その他、学長が必要と認めた職員

事 務 局：地域連携推進センター職員

○組織図


学　長
評議会
九州共立大学
地域連携推進センター
協定・連携
協定・連携
北九州市
北九州市教育委員会
北九州商工会議所
北九州市スポーツ協会
岡垣町
水巻町
芦屋町
遠賀町
宗像市
中間市
八幡西区（協力機関）
遠賀信用金庫
北九州あゆみの会
福岡県立社会教育総合センター
福岡県立英彦山青年の家
福岡県立少年自然の家「玄海の家」
第一生命保険(株)
サンビレッジ茜
(株)フォーバル
地域連携協議会
地域連携推進事業評価委員会

九州共立大学
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY
パンデミックに対する国際協力など
健康と安心を守る社会保障制度など
衛生的な食の提供など
安心できる保健制度など
質の高いオンライン教育など
DVの防止など
感染を防ぐ衛生管理など
健康と安全を保証できるエネルギーなど
健康的な新しいワークスタイルなど
革新的な医療や情報インフラなど
危機状況下での差別の解消など
健康を守る社会インフラなど
必要な物資の適切な配分と流通など
気候変動と感染拡大の関連性の研究など
生態系とウイルスの関連性の研究など
動物由来のウイルス感染防止など
リスクに対する情報開示と説明など

目　次

《 地域連携･貢献事業 》

【水巻町】

水巻町環境出前講座事業

JR 水巻駅周辺イルミネーション事業

【岡垣町】

住民に「潤い」と「憩い」を提供する「まつり岡垣」

第 34 回ふれあいスポーツデー 第 21 回岡垣ウォーキング大会・マラソン大会

ふれあいファミリー体力測定会

障がい者クリスマス交流会

【遠賀町】

水巻･遠賀地区バスケットボール教室

遠賀川駅前イルミネーション事業

【北九州市】

子ども食堂プロジェクト

【八幡西区】

第 23 回堀川いっせい清掃

【中間市】

中間市「部活動改革実証事業」

【宗像市】

運動部活動の地域移行支援事業

離島（大島地区）の健康づくり事業

【福岡県立社会教育総合センター】

社教センターフェスティバル

第 41 回中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会

【福岡県立英彦山青年の家】

ひこさんミドルキャンプ（スポーツ社会教育実習）

【遠賀信用金庫】

「拝命 社長秘書」ー社長に同行する２日間ー

【その他】

スポーツ安全協会助成事業「令和６年度スポーツ活動等普及奨励助成事業」

第１回 東アジアふうせんバレーボール大会

地島プロジェクト

小学生のためのレベルアップ短期水泳教室

折尾イルミネーション

地域防災人材育成プログラム

《 研究推進事業 》

宗像市「大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト」（経済学部後藤准教授）

宗像市「大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト」（経済学部森部准教授）

宗像市「大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト」（経済学部木村講師）

宗像市「大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト」（スポーツ学部松﨑講師）

《 生涯学習事業 》

2024 年度【前期・後期】公開講座・市民カレッジ実績報告

九州共立大学　地域貢献・連携事業報告書

事業プラン名		水巻町環境出前講座事業
九共大	担当者	森江　由美子
	所　属	経済学部　経済・経営学科
連携機関	機関名	水巻町
	責任者	産業環境課　環境係
事業実施日・回数		10/26、10/27、11/19、11/22　計４回
実施場所		猪熊小学校、頃末小学校、みどりんぱぁーく(コスモス祭り)
事業対象者･参加人数		経済･経営学科科目ワークショップ B 及び D(ステ･公)履修者 32 名
経　　費		0 円（交通費は水巻町負担）
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 当事業は、水巻町内の小学校 2 校、猪熊小学校、頃末小学校に対して、水巻町地球温暖化防止活動推進員の実施する環境出前講座を、本学経済学部経済･経営学科の授業科目であるワークショップ B 及び D(ステ･公)を履修する学生が運営サポートすることにより、子どもたちが環境問題について楽しく学び、さらなる理解促進に繋げることを目的とする。 また、水巻町コスモス祭り環境教育ブースにおいても、運営サポートを行ったが、これは、来場者に環境問題に関する知識を身に付けてもらうことを目的とする取り組みである。 **２．実績** 出前講座は、子どもたちに、地域のゴミ問題、食品ロス問題を学んでもらい、また、家庭ゴミ（サンプル）の分別及びパッカー車への投入を体験してもらうが、本学の学生は、食品ロス問題の講師と分別体験のサポートを担当した。 コスモス祭り環境教育ブースにおいては、「気候変動クイズ」のパネルを使い、来場者にはクイズに挑戦していただき、推進員や応援スタッフ（本学学生）と答え合わせをした後、エコファミリーについて説明を行うことにより、環境問題に関する知識を身に付けてもらった。 **３．効果** 出前講座においては、水巻町地球温暖化防止活動推進員の方に代わり、食品ロス問題の講師を本学学生が担当させていただいているが、説明にクイズを取り入れる等工夫を凝らしたことにより、子どもたちがより環境問題に興味を持ち、学んだことを直ぐに実践したいと約束してくれたとの報告を昨年度も産業環境課より受けている。 また、コスモス祭り環境教育ブースにおいては、来場者の環境問題への理解を深めることに貢献することができたと考える。なお、参加学生は全員公務員志望者であるため、将来自分たちが希望する行政職の職務内容や、職員の方々の仕事に対する姿勢等について、この連携事業を通して理解が深まったと感じられる。
学生の声		ごみの分別をテーマに複数校で授業を行いました。当初は準備不足で参加してしまい、子供達からの疑問に答えることができませんでした。この経験を踏まえ、その後はチームで事前に役割分担を明確にし、関連知識の調査・想定質問への回答準備など入念な準備を行いました。その結果、子供達は授業を理解し積極的にごみの分別をしてくれると約束してくれました。この経験から、事前準備の重要性と、周囲と連携しながらより良い成果を生み出す力を学びました。
今後の改善内容及び展開		令和 7 年度においても水巻町環境出前講座事業は継続されるため、引き続きワークショップ C（ステ・公）の履修者を各小学校に派遣し、子どもたちの環境問題へのさらなる理解に繋げていきたい。 また、この事業を通して、行政職志望の学生の職業観も養っていきたい。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

事業プラン名		JR 水巻駅周辺イルミネーション事業
九共大	担当者	黒田　伸太郎
	所　属	経済学部
連携機関	機関名	水巻町
	責任者	産業環境課　課長　大黒　秀一　氏
事業実施日・回数		7 月～2 月・6 回
実施場所		水巻町役場・JR 水巻駅
事業対象者･参加人数		九州共立大学　経済学部　2 名
経　　費		水巻町
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 水巻町ならではの特色を活かし、町と交流があるオランダの文化を取り入れたイルミネーションを JR 水巻駅前に設置する。また、点灯式やクリスマスマーケットを同時に開催することで、来場者にオランダ文化を親しみやすい形で提供する。本事業により、地域活性化、にぎわいづくりを進め、新たなオランダとの文化交流につなげることを目的とする。 **2．実績** 8 月から 2 月までの期間に開催された 4 回の実行委員会への出席、並びに JR 水巻駅前のイルミネーション設置と点灯式への参加を行った。実行委員会では、町民や役場職員とともに本学（地域創造学科）の学生 2 名が参加し、学生の視点でディスカッションを行った。 12 月 6 日にはイルミネーションの点灯式をクリスマスマーケットが開催され、多数の来場者で賑わいがあった。なお、点灯式では本学学生が司会を務め、点灯式の盛り上がりに貢献した。実行委員会での振り返りでは、イルミネーションや点灯式の改善策を提案するなど、町の期待以上に学生は実行委員の責任を果たすことができた。 **3．効果** 水巻町を始め、人口減少や高齢化に悩む多くの市町村では、いかにして「賑わい」を創出するかが喫緊の課題である。今回の連携では、大学からほど近い町との連携により、賑わいを生むための検討や対話の大切さを学生は学んだ。 また、水巻町との長い歴史を持つオランダとのつながりのように、実行委員として関与しなければ知りえない情報や商工会関係者との対話など、地域連携によって得られた知見は大きい。学生は地域社会の営みとともに、そこで地域社会のための働く人々と接することで、地域社会を多面的に見る機会も得た。地域創造学科の学生は、様々な実習を通じて地域社会の課題や課題解決に取り組む手段について学習する機会を多く持つ。単に地域社会に出て地域住民の支援をするだけでなく、地域社会の現状と直面する課題を実際に見て、聞いて、考えることで、地域創造人材へと変容することが期待できる。こうした連携に基づく実習は今後も継続することが重要であると再認識した。 本連携事業は、このように関係した学生の成長に大いに寄与するものであった。
学生の声		・賑わいを作ることの難しさを感じたが、役場や町民の皆さんの普段は目に見えない地道な努力が地域を作っているということを考えさせられた。 ・点灯式での司会が楽しかった。折尾高校の生徒や水巻中学校の生徒も多くイベントに参加しており、本学ももっと積極的に地域に関わるべきだと感じた。
今後の改善内容及び展開		本事業は、年度開始後に連携の打診があったため、参加学生が少なく、また、実際に連携できた期間も短かった。次年度以降は年度当初から役場との連携を密に行うことで、町のニーズとともに学生の学びにより効果的なプログラムとできると考える。 なお、役場の職員から、参加した 2 名の学生の評判が大変高かった。指導する立場としても、こうした外部評価は大変ありがたく、また、学生自身もそうした期待を背負って活動することに意義を感じていた様子であった。行政との地域連携は年度単位での実践となってしまうデメリットはあるが、他方で行政から学生や大学へのアカデミックな知識の提供や大学生という立場を活かした立ち振る舞いが求められ、そうした要望に応えることができる学生を育成していくことが益々重要になっていると思われる。

事業プラン名		住民に「潤い」と「憩い」を提供する「まつり岡垣」
九共大	担当者	黒田　伸太郎
	所　属	経済学部
連携機関	機関名	岡垣町
	責任者	おかがきPR課　課長　有働　貴幸　氏
事業実施日・回数		2024年4月～11月・11回
実施場所		岡垣町役場
事業対象者･参加人数		九州共立大学　経済学部　16名
経　　費		岡垣町
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 住民が主体的に参加し交流する機会をつくることや、地域振興に対する意識の高揚、町民一人ひとりの融和を図ることを目的に実施されている「まつり岡垣」は、例年約2万人の来場がある町最大のイベントである。この「まつり岡垣」の運営スタッフとして本学学生が参加し、地域住民と一体となったイベントに取り組んでもらうことで、様々な職種や団体の住民とふれあい、地域について学ぶことを目的とする。 **2．実績** 5月から11月までの期間に開催された実行委員会への出席並びに「まつり岡垣」当日参加した。特に、まつり当日は、役場や観光協会とのスムーズな連携によって、祭りの成功に大きく寄与した。 祭りの後に、学生に振り返りをさせ、参加した感想だけでなく、祭りの改善点も提案するなど、役場に対するフィードバックも行った。実践と学習の往還により、地域に対する学びを深めることができた。 **3．効果** 地域ワークショップでは、地域社会の現状をステークホルダーとともに学び、また実際にそこへ参加することで学習効果を高めている。本連携事業でも、岡垣町の役場職員や地域住民、祭りの来場者等多くの人々と有機的な接点を持つことができ、祭りというイベントへの参加を通じて地域社会の多面的な一面を知ることができた。 なお、祭りでは来場者に児童が多く、大学生として児童と接する機会が少ない学生には貴重な経験になったようである。児童もまた地域住民の一人であり、年齢を問わず地域参加する実態に触れることでステークホルダーの意味を拡張するという効果もあった。
学生の声		・町の企画である大きな祭りに参加したのは初めてだったが、まつり全体の雰囲気も良く、思った以上に来場者があって、地域活性化に祭りが大きく貢献していることを実感した。 ・役場職員や実行委員会の皆さんが随分前から準備し、町民のために色々な議論をしていることを知る事ができてよかった。
今後の改善内容及び展開		集中講義として開講しているが、学生の態度や学ぶ姿勢が役場や実行委員会からは高い評価を得た。大きなイベントではあるが、町の政策の裏側に触れることができる貴重な機会となっており、学生のキャリア形成に資する時間にもなることで学習効果がより高くなっている。 学生が関われる範囲で行政との連携を行うことで、学生が地域社会への理解を深める機会となっている。さらに、楽しく体を動かす経験から、公務員に対するイメージを変える契機にもつながっており、こうした社会や仕事の内実を垣間見ることができる実習は、引き続き積極的に続けていく必要がある。

事業プラン名		第 34 回ふれあいスポーツデー　第 21 回岡垣ウォーキング大会・マラソン大会
九共大	担当者	名頭薗　亮太
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	岡垣町
	責任者	生涯学習課　公民館係
事業実施日・回数		2025 年 3 月 9 日《計 1 回》
実施場所		岡垣町立内浦小学校　運動場
事業対象者･参加人数		ウォーキング・マラソン大会参加者　269 名 スポーツ学部学生　7 名
経　　費		地域連携推進センター/岡垣町（謝金等）
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 第 21 回岡垣ウォーキング大会・マラソン大会の参加者を対象に、「体力測定会」を実施した。主に小・中学生を対象に跳躍力や投能力、敏捷性の測定とフィードバックを実施することで、今後のスポーツ活動や体力づくりを楽しく健康的に行うための一助とすることを目的とした。また、ウォーキング大会・マラソン大会を安全に実施するためにイベント中の救護活動にも取り組んだ。本イベントを開催するにあたり、教員 1 名が事前事後の委員会に参加し、実施内容の検討や安全に開催するための打ち合わせを実施した。 **2．実績** 「体力測定会」では、跳躍力（垂直跳び）、投能力（ドッジボール投げの投球速度）、敏捷性（T テスト）の 3 種目を実施した。オリジナルの測定記録用紙を作成し、記録の記入だけでなくフィードバック用の基準値なども記載し、小学生でも体力測定の結果の良し悪しが分かりやすくなるようにした。測定会の参加者数は小学校低学年 35 名、小学校高学年 50 名、中学生 11 名、高校生 4 名の合計 100 名であった。 **3．効果** 今回実施した体力測定では、学校で実施されている新体力テストとは異なる測定項目を設けた。さらに、スピードガンや加速度センサーを活用することで、普段では測定できない専門的な体力を評価することができたため、参加者にとって新たな気づきに繋がったのではないかと考える。また、保護者の方からも測定内容について熱心な質問があり、有益な情報を提供できたのではないかと考える。
学生の声		学生からは、「普段大学で学習している専門的な用語を、小学生や保護者の方、地域の方々に分かりやすく伝えることが難しかった」「測定は問題なく行えたが、測定結果を伝えることに苦戦した」「様々な世代の方と接することができて貴重だった」といったコミュニケーションに関する意見が多かった。
今後の改善内容及び展開		昨年度は測定種目を 10 種目設けていたため、測定だけ実施しフィードバックをする余裕がなかった。そのため、今年度は種目を 3 種目に変更し、記録用紙にもフィードバックの説明を記載するといった工夫を行なった。昨年度に比べると本学学生と参加者がコミュニケーションを取る時間が多く確保できていたと思われる。しかしながら、参加者の待ち時間も少し長い様子であったため、来年度以降は種目の追加とそれに伴う人員の増加ができるとより良い会になると思われる。また、今年度は参加者の記録を控え、学年や性別、専門競技別に各測定項目の平均値を算出することができたため、来年度以降も継続し地域にフィードバックすることで、岡垣町における子ども世代の体力向上の一助に繋がるのでないかと考える。また、「救護活動」についても引き続き継続し、安全なスポーツ活動の場づくりに貢献できればと考えている。

九州共立大学

事業プラン名		ふれあいファミリー体力測定会
九共大	担当者	名頭薗　亮太
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	岡垣町
	責任者	生涯学習課　公民館係
事業実施日・回数		2024 年 8 月 25 日《計 1 回》
実施場所		岡垣サンリーアイ　ウェーブアリーナ
事業対象者･参加人数		参加者：約 30 名、スポーツ学部学生：6 名
経　　費		地域連携推進センター/岡垣町（謝金等）
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 家族でスポーツに親しむ習慣を身につけてもらうことを目的とした「ふれあいファミリー体力測定会」に測定補助者として、本学スポーツ学部の学生とともに参加した。受付時の血圧測定の補助や準備運動、6 種目の体力テストのデモンストレーションと測定の補助を行った。 **2．実績** 全ての参加者の方へ体力テストを怪我等なく実施することができた。本学学生は、受付時に行う血圧測定の補助の際に、参加者の方に対してコミュニケーションを取りながら体調に関する内容の聴き取りを実施し、安全に参加できそうか確認を行った。その後、準備運動を参加者の前でお手本を見せながら実施した。体力テストの説明の際は、デモンストレーション役を担当した。測定の際は、再度やり方の説明や記録、補助などに取り組んだ。 **3．効果** 全ての方が安全に楽しく体力テストに取り組んでおり、体力測定の結果についてフィードバックもあったことから、参加者の方にとって今後のスポーツ習慣を身につける良いきっかけになったと思われる。また、参加した本学の学生も普段接することが少ない小学生や高齢者の方に測定の説明を行うことで、スポーツ指導における実践力が身についたと思われる。
学生の声		学生からは、「小学生や高齢者の方など普段関わりが少ない年代の人とコミュニケーションが取れて楽しかった」という意見や「年代によって説明の仕方を工夫する必要性について気づけた」とする意見が多くあった。
今後の改善内容及び展開		体力測定が早く終わった方は待ち時間が少しあった。昨年度は待ち時間等に本学が用意した歩行分析を実施することができたが、今年度は実施できなかった。来年度以降は歩行分析や体組成測定など、町民の方の健康づくりに貢献できるような測定項目を提案していきたいと考えている。さらに、今後も岡垣町との連携を深めながら、本事業のような体力測定を実施する機会を増やしていき、楽しく健康的にスポーツ活動を実施できるような社会づくりに貢献したい。また、地域連携事業を通して、実践力のあるスポーツ指導者の育成やスポーツイベントのマネジメントに関わるような人材の育成にも取り組みたい。

事業プラン名		障がい者クリスマス交流会
九共大	担当者	花田　道子、アダプテッド・スポーツ研究部
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	岡垣町社会福祉協議会
	責任者	地域福祉係
事業実施日・回数		2024 年 12 月 8 日（日）《 全１回 》
実施場所		岡垣町社会福祉協議会「いこいの里」
事業対象者･参加人数		事業対象者：町内在住の障がいのある人や児童約 90 名 参加人数（学生ボランティア）：18 名
経　　費		地域連携推進センター/岡垣町社会福祉協議会（謝金等）
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 本事業は、岡垣町社会福祉協議会が主催し、障がい者のふれあい交流と社会参加の促進を目的に、九州共立大学・九州女子大学のアダプテッドスポーツ研究部の学生が協力して開催されている。 **２．実績** 「みんなで楽しくレクリエーション」を約１時間アダプテッドスポーツ研究部の学生が中心となり提供した。日頃の体操教室の経験を活かし、障がいがあっても一緒に楽しめるプログラムの作成に努めることができた。その結果、みなさん積極的に参加して下さり会場が笑顔に包まれた。これまでは年齢層が高い傾向にあったが今年度は子どもから若者の参加もあり、大学生も含め、異年齢の交流も深めることができた。帰り際に、「楽しかった！」とたくさんの方からお言葉を頂き、学生たちの自信にも繋がったようである。岡垣町社会福祉協議会の方からも来年も、是非来て欲しいと要望があった。 **３．効果** 障がい者とボランティア、地域住民が交流することで、互いの理解が深まり、支え合う関係が築かれている。特に、大学生ボランティアの参加は、若い世代の地域貢献意識を高めるきっかけとなっている。交流会では、障がいのある方々が地域の人々と楽しく過ごす機会が提供される。これにより、障がい者が地域社会の一員として受け入れられ、助け合えるコミュニティができる。 また、クリスマス交流会は、地域のイベントとして定着しており、多くの人が参加することで町の魅力を高める要因となっている。このように、交流会は単なるイベントではなく、地域社会の結びつきを強め、より温かいコミュニティを形成する重要な役割を果たしている。本学はセンター職員と連携・協働してプログラムを効果的に実施するなど、本事業を成功させる原動力になった。
学生の声		岡垣町社会福祉協議会の方々と早い段階から綿密な打ち合わせを重ね、より良い会となるよう内容を慎重に検討しました。参加者の皆様を事前に把握し、多くの方と触れ合える工夫を凝らしながら、誰もが楽しんで参加できるよう努めました。このような貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。
今後の改善内容及び展開		今年度は岡垣町社会福祉協議会の方が大学に何回か出向き、アダプテッドスポーツ研究部の活動に参加してくださったりと協力してこの事業成功のために企画を練ることができた。アイスブレイクから始まり、1.手拍子体操、2.ハイタッチリレー、3.自己紹介ゲーム、4.この曲な～んだ、5.はちゃめちゃカラーボールバレー、6.班のみんなで協力！7.クロスワード！、8.フォトフレームづくりと学生たちの想いがたくさん詰まった素敵なプログラムであった。打合せの段階から学生たちが責任感を持って関わり、貴重な経験をさせて頂いた。今後も学生たちのマンパワーが社会の力となるように地域と連携し、これからも頑張りたい。

サンタさんだ～

「楽しかった～☆彡」

プレゼントお届け中

サンタさん/トナカイさん出発

リズム合わせゲーム(^^♪

自己紹介ゲーム※1）

※１）サイコロの出た数によって、６問のいろいろな質問を準備した。①好きな食べ物は？など

事業プラン名		水巻・遠賀地区バスケットボール教室
九共大	担当者	川面　剛
	所　属	九州共立大学スポーツ学部子どもスポーツ教育学科
連携機関	機関名	遠賀町教育委員会
	責任者	生涯学習課　スポーツ文化係
事業実施日・回数		2025 年 1 月 26 日(日)9 時 00 分から 11 時 00 分　1 回
実施場所		浅木小学校体育館
事業対象者･参加人数		小学 1 年生から 6 年生　参加人数 22 名
経　費		なし
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** まずはじめに、水巻・遠賀地区に在住する児童を対象として、バスケットボール教室を開催いたしました。本教室には主に小学１年生から６年生までの児童が参加し、その多くがバスケットボール未経験者でした。教室では、バスケットボールを初めて扱う子ども達に対して、ボールを使った基本的な動作を通じて「扱う楽しさ」を感じてもらうことを重視しました。また、相手の駆け引きの要素や、仲間と力を合わせて得点を目指すチームプレーの魅力についても、練習を通じて体験をしてもらいました。これらの活動を通じて、子ども達がバスケットボールに親しみを持つとともに、身体を動かすことの楽しさや仲間と協力する喜びを実感してもらうことを、本教室の目的としています。 **2．実績** 本教室では、地域に在住する小学 1 年生から 6 年生までの児童が幅広く参加をし、それぞれの学年や個々の運動経験に応じて、無理なく活動に取り組めるよう配慮を行いました。参加した子ども達は、地域の繋がりの中で安心して参加できる雰囲気のもと、年齢差を超えて互いに協力し合いながら、バスケットボールの基礎的な動作や身体をうごかす楽しさを体感していました。 **3．効果** 本教室の導入部分では、いきなり専門的なバスケットボールの技術指導を行うのではなく、まずは、「鬼ごっこ」などの簡単な遊びを取り入れたアイスブレイクを行いました。これにより、初対面同士の子ども達がリラックスして打ち解けることができ、安心して活動に参加できる雰囲気づくりを心がけました。このような工夫は、参加者の不安を軽減し、自発的に身体を動かすきっかけを与えることができたと思います。その後は、徐々にバスケットボールの要素を練習で取り入れていき、自然な形で技術的な動作にも慣れていけるように配慮しながら実技指導を行いました。具体的には、ボールを使った遊びから始まり、ドリブルやパスといった基本動作に進んでいくことで、子ども達は無理なくバスケットボールの基礎に取り組んでいました。また、活動の最後に設けた質問コーナーでは、多くの参加者が積極的に手を挙げて質問をする様子が見られ、その姿からはバスケットボールに対する高い関心と学びに対する前向きな姿勢が伺えました。このような子ども達の意欲的な姿勢は、本教室が充実した学びと経験の場となったと考えられます。
学生の声		今回、学生は日程が合わず参加できなかった。
今後の改善内容及び展開		今後も水巻・遠賀地区の方々と連携を図り、運動する楽しさ、スポーツ活動を通じて社会づくりに貢献したいと考えている。また、今回、学生が日程が合わず参加できなかったが、来年度は、学生にも参加をして子ども達と触れ合い、今後の活動に活かしてもらえるように調整していきたいと考えている。

事業プラン名		遠賀川駅前イルミネーション事業
九共大	担当者	黒田　伸太郎
	所　属	経済学部
連携機関	機関名	遠賀町商工会
	責任者	経営指導員　辻本　泰一　氏
事業実施日・回数		4 月～1 月・16 回
実施場所		九州共立大学・JR 遠賀川駅前広場・おんがみらいテラス
事業対象者･参加人数		九州共立大学　経済学部　学生 16 名
経　　費		遠賀町商工会
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 本事業では、遠賀町商工会との連携により、駅前活性化に資するイルミネーションの企画検討、作成、設置作業を実施した。同イルミネーション事業では、大学生との協働による新たな事業展開を希望されており、商工会職員や地域住民とともに駅前活性化につながるようなイルミネーションのアイデアを共有して、実際に設置や点灯式に参加した。 **2．実績** 4 月から翌年 1 月にかけて、学内並びに商工会、JR 遠賀川駅において実習を行った。特に、イルミネーションの企画では、商工会職員とのワークショップや学生による企画案のプレゼンテーションを経て、設置作業や点灯式を迎えた。点灯式には多数の町民が来場し、アンケート結果からは学生との協働を高く評価する意見も多くみられた。 **3．効果** 本学学生が商工会のイルミネーション事業を共に実施することで、商工会の課題解決とともに、学生が地域の現状を知るだけなく、頭と身体を動かして課題解決策を実践することで、机上では得られない経験と知識を得た。 商工会においても、学生による事業アイデアの多様さや新鮮さによって、改めてイルミネーション事業や駅前活性化を商工会で議論する契機にもなったとのことである。 このような協働関係者の双方が WinWin となるような連携こそ本学の強みであり、また、地域創造学科が行っている学外実習の効果と言える。
学生の声		・イルミネーションの設置では年配の方に色々と町の事も教えてもらいながらの作業で楽しかった。 ・町の課題や駅前活性化は実際にその地に訪れ、対話することで具体的に理解することができ、大変有意義だった。
今後の改善内容及び展開		実習の一環として遠賀町商工会と事前に綿密な打合せを行い、連携を行った。地域住民とのコミュニケーションや商工業の現状を調査すること、課題解決を具体化して実行することなどは、地域創造学科のＤＰにある「地域社会の振興と発展に寄与できる実践力を備えた人材を養成」に寄与するものであると考える。 今後も、協働の依頼には積極的に応じていくことで、本学の地域での価値がより高まっていくと思われる。

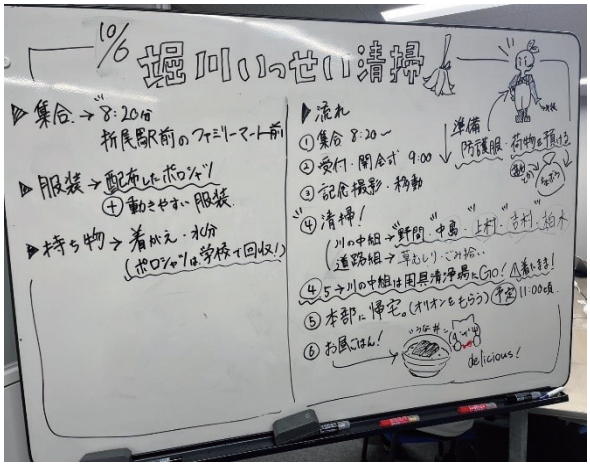
ABERCROMBIE
& FITCH

①かぼちゃの馬車

バス
Bus

事業プラン名		子ども食堂プロジェクト
九共大	担当者	甘　長青（ちょボラ部部長）・尾上百合加（ちょボラ部副部長）
	所　属	経済学部
連携機関	機関名	北九州市役所子育て支援課、元気食堂、たけごはん、子ども食堂ひだまり、 子ども食堂～居場所
	責任者	元気食堂（北九州市社会福祉協議会　四宮　嵩世氏） たけごはん（Community Family Team LUCE　桒野 明子氏）等
事業実施日・回数		2024 年 4 月～2025 年 3 月《 全 28 回 》
実施場所		筒井市民センター他
事業対象者･参加人数		事業対象者：子ども食堂参加の小学生 参加学生数：九州共立大学　のべ 82 人
経　　費		なし
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 子ども食堂は、地域の大人が子どもに無料または低額で食事を提供し、孤食の防止や安心して過ごせる子どもの居場所づくりを目的とした全国的な取り組みである。 北九州市においても、平成 28 年度から 2 年間、公設民営による子ども食堂のモデル事業を実施し、そのノウハウを民間に広げることで、民間主体の活動として子ども食堂を普及させてきた。その結果、現在では市内の子ども食堂は約 85 ヶ所にまで増加している。本プロジェクトにおいて、本学の学生は、こうした地域の子ども食堂の運営支援や交流活動に参加することで、地域課題の理解を深め、子どもたちとの関わりを通じて、将来の地域づくりに資する人材の育成を図る。 **2．実績** ちょボラ部では、北九州市内で開催されている 3 カ所の子ども食堂に定期的に参加し、それぞれの主催する地域の方々と連携しながら、子どもたちの居場所づくりに取り組んだ。 活動内容としては、一緒に食事をすることに加え、宿題等の学習指導や遊びなど、保護者がお迎えに来るまでの時間を子どもたちが安心して楽しく過ごせるように努めた。 令和 6 年度の 1 年間で、これらの子ども食堂は、合計 28 回開催され、本学からのべ 82 名の大学生がボランティアとして参加した。継続的な関わりを通じて、これまで気づかなかった子どもたちの様子などを感じ取ることができ、大学生が大人と子どもの架け橋となることができたのではないかと考える。 **3．効果** 子ども食堂では、大学生も子どもたちと一緒に食事をすることで、自然な交流が生まれ、地域への関心や地域貢献意識も高まった。一方で、学校の先生や保護者以外の大人とふれあう機会が少ない子どもたちにとって、大学生の存在は新鮮で親しみやすく、子ども食堂が楽しく安心できる居場所となっている。大学生が関わることで、世代を越えたコミュニケーションが生まれ、子どもたちにとっても貴重な体験の場となっているのではないかと考える。
学生の声		学生からは、「子どもだけでなく、地域の人も参加していることを知った」といった感想や「回数を重ねるごとに、より良好な関係性を築くことができた。また、子どもたちが友達を誘ったりと、子どもたちの人数も一気に増え、活気あふれる活動となっている」といった様子が寄せられた。
今後の改善内容及び展開		現在、子ども食堂は「子どものための場」から「多世代型の地域交流拠点」へと変化しつつある。そのためには、より多くの大学生に子ども食堂の存在を知ってもらい、地域の一員としての意識を高めることが重要であると感じている。 また、いまだに子ども食堂に対してマイナスイメージを持つ人もいる中で、大学生が実際に参加することによって、そのようなイメージを少しでも払拭していければと思う。

事業プラン名		第 23 回　堀川いっせい清掃
九共大	担当者	甘　長青（ちょボラ部部長）
	所　属	ちょボラ部
連携機関	機関名	堀川まちおこし事業実行委員会
	責任者	おりお堀川を愛する会　重藤(しげとう)　一(はじめ)　氏
事業実施日・回数		2024 年 10 月 6 日（日）9:00～11:00
実施場所		八幡西区折尾地区[堀川周辺]
事業対象者･参加人数		事業対象者：周辺地域の教育機関、企業、行政、地元住民、など 参加者数　：九州共立大学　ちょボラ部　16 名
経　　費		なし
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 本活動は、「堀川を何とかしよう」という地域住民の強い思いから平成 14 年度に堀川地域で始まった清掃活動であり、当初はわずか 40 人の参加者から出発した。その後、年々規模を拡大し、現在では 300 人を超える参加者が集う、地域に根ざした一大行事へと発展している。 本清掃活動は、単なる清掃にとどまらず、①堀川の持つ歴史的・環境的価値やその偉大さを広く共有すること、②ふるさとに対する愛着や郷土愛を育むこと、③地域住民や参加者一人ひとりのモラルや公共マナーの向上を促すこと、という三つの柱を掲げて実施されている。 これらの取り組みを通じて、堀川をかつてのような美しく清らかな川へと再生させ、次世代へと継承していくとともに、地域住民が安心して暮らすことのできる、より住みやすいまちの実現を目指して継続的に行われている地域の重要な活動である。 **2．実績** 今年で 23 回目を迎えた堀川いっせい清掃では、開会式に約 300 人が集まり、参加者は 6 班に分かれて活動を開始した。八幡西区折尾地区を流れる新堀川（河守神社～折尾高校～光明）をきれいにしようと、高校生や大学生、地域住民などが参加し、日頃から親しまれている川への感謝と愛着を込めて、清掃作業が行われた。作業は胴長を着て川底のゴミを拾う人、ゴミを入れたバケツを路上に引き上げる人、道端のゴミや草木を取り除く人、安全確保のために見守る人など、それぞれが役割を担い、チーム一丸となって協力しながら進められていた。 本学の男子学生は率先して川の中に入り、普段目の届かないところまで、たくさんのゴミを集めることができた。毎年参加している学生もおり、清掃の流れや場所が分かっていたので、柔軟に対応することができた。 **3．効果** 清掃活動を通じて、地域住民との交流を図ることができた。一緒に汗を流し、協力し合う過程において、地域への愛着や連帯感が醸成され、コミュニティの活性化へとつながった。堀川が美しくなることは、地域全体のイメージ向上にも寄与し、ひいてはより広範なまちづくりへの貢献にもつながるものである。
学生の声		学生からは、「清掃前と後では川の見た目が全然違って、きれいになったことに感動した。小さな努力でも積み重ねれば大きな変化を生むことを学んだ。さらに、自分たちの手で地域に貢献できたという実感が持てて、とても充実した時間だった」といった感想や、「普段あまり接点のない世代の人たちと協力することで地域への愛着が深まった」といった感想が寄せられた。
今後の改善内容及び展開		毎年、この清掃活動を楽しみにしている大学生も多く、活動後には「また来年も参加したい」との声も聞かれた。 本活動は、単発の清掃イベントとして終わるのではなく、地域の一員として堀川を守り続けるという意識を共有しながら実施していくことが重要だと考える。今後も地域住民や行政、学校、企業などと連携しながら、堀川を次世代に引き継ぐための活動を大切に続けていきたい。


10/6
堀川いっせい清掃
▶集合 → 8:20分
折尾駅前のファミリーマート前
▶服装 → 配布したポロシャツ
＋動きやすい服装
▶持ち物 → 着替え・水分
(ポロシャツは学校で回収!)
▶流れ
① 集合 8:20〜
② 受付・開会式 9:00
③ 記念撮影・移動
④ 清掃!
(川の中組 → 野間・中島・上村・吉村・柏木
道路組 → 草むしり・ごみ拾い
④5 → 川の中組は周辺清掃にGo!
⑤ 本部に帰宅。(オリオンをもらう) 予定 11:00頃
⑥ お昼ごはん!
delicious!

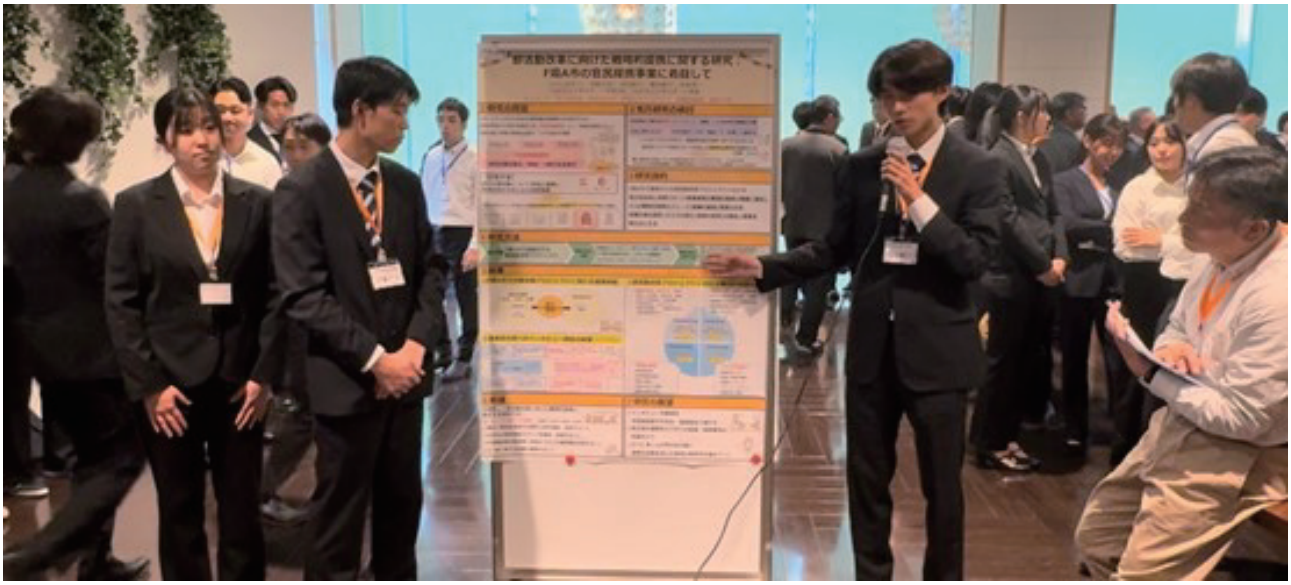
KYORITSU
REGIONAL DEVELOPMENT

事業プラン名		堀川いっせい清掃
九共大	担当者	顧問　木村美奈子　・学生統括 佐藤真愛
	所　属	SDGs チャレンジアクション研究会
連携機関	機関名	堀川まちおこし事業実行委員会
	責任者	おりお堀川を愛する会　重藤 一氏
事業実施日・回数		2024 年 10 月 6 日
実施場所		八幡西区折尾地区（堀川周辺）
事業対象者･参加人数		事業対象者：周辺地域の企業、教育機関、地元住民及び行政 参加人数：12 名
経　　費		なし
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 200 年前に完成した、川と海をつなぎ人々の生活を豊かにしてきた人口運河『折尾堀川』は、運河としての役割がなくなった現代でも、地域の文化的シンボルとして位置付けられている。 本事業は、堀川まちおこし事業の一環として堀川の保全活動を折尾地区周辺の企業、教育機関、地域住民及び行政が一丸となり行う一斉清掃である。 **2．実績** 堀川まちおこし事業の一環として 2002 年よりはじまった堀川いっせい清掃は 2024 年で 23 回目となる。 本年度は 12 名の学生が参加し、班を構成した企業（建設会社・JR 九州）との協同で作業を行った。九州共立大学のほかに、北九州市立大学の大学祭実行委員会の学生と協力して清掃を行った。 川中では水中に沈んでいるゴミなどを丁寧に拾い、川の両岸では雑草取りとゴミ拾いを行った。また、川付近の道路のごみ拾いも行った。毎年、多数上がるゴミと一緒に、盗難被害にあった自転車や財布・バックなども発見され、警察への引き渡し作業なども行った。 また、毎年実施している川に生息している生き物の観察及び水質確認を行った。フナやエビなどの生き物を観察することができた。 **3．効果** 本事業は、堀川の保全活動であるが、町おこし事業としての性格もあり、折尾周辺の企業、教育機関、地元住民及び行政が、同日同時間に一堂に会して作業を行うことから、作業しながら会話を楽しみながら、地域の方と関わりあえることが学生たちにとっても良い機会となっている。 大学所在地である折尾のまちを自分たちも参画してきれいにしているという自覚が生まれ、学生たちの第二のふるさと「折尾」に対する地元愛の醸成に役立っている。
学生の声		毎年地域みんなで行っている活動で、私たちもこの活動を楽しみにしています。川の中のごみとして自転車が数台あがるのが恒例です。またバックや財布などもあり、警察官に引き渡し作業を行ったりしています。作業は大変ですが、その分、掃除が終わったあとは達成感があります。また掃除と平行して水生生物の採取も行っています。今回は上流区域の担当だったので、水中や川縁には様々な水生生物が生息しており、その水域の水環境が改善されていることを感じることができました。
今後の改善内容及び展開		本研究会では折尾地区の様々な町おこし、まちの賑わいづくりに参画しており、特に堀川の環境保全運動として別途「オリオンピック」の企画運営にも携わり、オリオンピックの収益金で堀川浄化のためにスラッジアウトの埋設も行っている。 川の水の浄化状態をデータ集計し、SNS などで情報を公開することで、堀川の環境保全活動に興味関心をもっていただき、一緒に活動する仲間を増やしていきたい。

事業プラン名		中間市「部活動改革実証事業に関する大学生の部活動指導員としての参画」 ～中学生のための持続可能な地域スポーツクラブ活動体制整備にむけて～
九共大	担当者	靏林　幸喜
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	中間市教育委員会
	責任者	学校教育課
事業実施日・回数		2024 年 7 月～2025 年 2 月の 67 日（134 時間）
実施場所		中間市立中間中学校グラウンド
事業対象者･参加人数		事業対象者：中間市立 4 中学校野球部員 参加人数：15 名（中学生）、1 名（大学生）
経　　費		中間市（スポーツ庁部活動改革に関する実証事業補助金）
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 本事業は、本学と中間市との包括的連携、及びスポーツ庁が推進する部活動改革「地域スポーツクラブ活動体制整備事業」の実証に貢献するものである。部活動改革は、教員の負担軽減、活動する中学生の活動機会の充実を図るものである。 中学校・高校で野球部活動を経験し、大学 2 年生で社会体育論、3 年生で地域スポーツ論を学ぶ学生が、土・日曜日の野球部活動を 4 校合同で行う中間市立中学校において、主管・練習会場校である母校の恩師からの要請を受けて、部活動指導員として中間市から任用され、ほぼ毎週指導に携わっている。 **2．実績** 2024 年 7 月から、毎週土曜日または日曜日のどちらか一日 2 時間程度、中間市立中間中学校グラウンドにおいて実施される、中間市立 4 中学校合同の野球部活動に、本学の学生 1 名が継続して部活動指導員として指導に携わった。指導においては野球に関する技術指導を中心に行った。 **3．効果** 土日の活動において、4 中学校の野球部顧問教員は交代で生徒の出欠、見守りを行い、練習に関しては学生が主となって指導した。従って、土日の野球部活動における教員の負担は大きく軽減された。 中学生にとっても、平日は自校で少ない人数でできることだけ練習しているが、土日の活動においては、チーム練習ができ、大会参加や練習試合も可能となり、他校の生徒とも交流できるなど、地域スポーツクラブ活動としてのメリットを享受している。 本事業への学生の参画は、中間市の教育や、スポーツ振興に対する大きな助けになっている。また、スポーツ庁が推進する部活動改革事業の実証にも貢献している。今後も地域スポーツクラブ活動の指導者として、継続的に携わることができれば、中間市の中学生のための持続可能なスポーツ環境づくりに貢献すること大である。
学生の声		事業に参画する学生からは、「これまでのスポーツ経験による知識や技能、大学での学びを活かすことができている。」「学校や教育委員会が企画する事業に貢献することができる成就感を感じている。」「中学校の部活動改革に関して、効果や課題が明確に見えている。」「自分自身の指導者としての自覚が高まり、社会人基礎力の向上につながっている。」といった声が抽出された。
今後の改善内容及び展開		中間市においては、2022 年度から吹奏楽部の土日の 4 中学校合同練習から実証事業を開始し、2023 年度陸上競技部、2024 年度野球部、2025 年度から柔道部が地域スポーツクラブ体制整備事業の実証事業として地域活動として展開している。中間市教育委員会は、今後さらに剣道部など他の競技種目にもこの事業を広げていく方針を示している。 本学は、2024 年度からスポーツ庁の重点地域指定を受けた福岡県教育庁と福岡県知事部局の依頼により、福岡大学や複数の企業と連携して「アスリート人材活用」に関する実証事業を行っている。この事業は 2025 年度も継続は決定しており、本学学生の「アスリート人材」としての活動は、中間市のみならず、北九州市、及び近郊の市町から要請される可能性が高い。 できるだけ多くの学生の指導者研修の受講、指導者としての登録により、本学が連携する市町を中心に、学生が地域スポーツの振興に貢献し、指導経験よる学生自身の成長を目指して、同様の事業を発展させる必要がある。

事業プラン名		運動部活動の地域移行支援事業
九共大	担当者	松﨑　淳
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	宗像市役所
	責任者	文化スポーツ課
事業実施日・回数		2024 年 4 月～2025 年 3 月（全 3 回）
実施場所		宗像市役所、グローバルアリーナ
事業対象者･参加人数		事業対象者：行政・スポーツ施設職員、地域住民、 参加人数：11 名（大学生・教員）
経　　費		九州共立大学スポーツ学部スポーツ学会助成金
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 本プロジェクトは、宗像市における中学生の部活動改革プロジェクトを調査対象とし、スポーツ政策の学術的探究を目的に実施された。学生 4 名は、宗像市役所文化スポーツ課およびグローバルアリーナ事業担当者に対する半構造化インタビューを通じて、改革の実態や課題を明らかにし、戦略的提携のフェーズに基づいた研究を進めた。その成果を、日本生涯スポーツ学会第 26 回大会におけるポスター発表としてまとめ、将来的に他自治体への知見共有を視野に入れた学術的・実践的な活動を展開している。さらに、本研究は松﨑ゼミナールの 3 年生が中心となって取り組み、ゼミ全体で先行研究の調査やリサーチクエスチョンの設定を協力して行い、学術的手法を実践的に学ぶ貴重な機会となった。今回得た知見は今後の卒業研究や地域連携活動への発展が期待される。 **2．実績** 本プロジェクトでは、宗像市の中学校における部活動改革を対象に実地調査を行い、宗像市役所文化スポーツ課およびグローバルアリーナ事業担当者への半構造化インタビューを通じて、改革の背景や官民連携の実態を把握した。得られたデータは、戦略的提携の理論枠組みに基づいて分析し、成果を日本生涯スポーツ学会第 26 回大会にてポスター発表として共有した。九州共立大学松﨑ゼミナールの 3 年生 10 名は、2 グループに分かれ、それぞれのテーマに関連する先行研究を調査・分析し、初めてのポスター発表に挑戦した。作業は困難を伴ったが、担当教員の支援のもと、発表に至るまでの過程で調査手法、情報整理、デザイン等の実践的スキルを習得し、他大学の学生や教員との交流からも多くを学ぶことができた。本発表は他自治体への共有も視野に入れた有意義な成果となった。 **3．効果** 本調査を通じて、学生は部活動改革における行政と民間の連携の複雑さや実践的課題を深く理解した。学会発表に向けた準備を通じて、政策的課題を論理的に整理し、他大学の学生や研究者と議論を交わす中で、自身の研究に対する客観的視点や応答力を高めた。また、地域実践を可視化したポスターを作成し、他自治体への共有を見据えた成果物として仕上げたことにより、社会的発信力と研究成果の展開力を養うことができた。これは今後の卒業研究や地域実践活動への波及効果にもつながる。
学生の声		「行政や民間事業者へのインタビューを通じて、理論と現場のギャップを体感できた」「地域の課題を自分たちの言葉でまとめることの難しさと意義を感じた」といった声が多く、学会参加は単なる知識獲得にとどまらない成長の機会となった。「他大学の学生と意見交換できたことが刺激になり、卒論のテーマがより明確になった」との意見や、「ポスターにして他自治体とも共有できる形にまとめたことで、自分たちの研究が実社会に貢献する可能性を感じた」といった達成感も報告されている。
今後の改善内容及び展開		今後は、調査対象を宗像市以外の自治体にも拡大し、多様な地域の部活動改革事例を比較・分析することで、汎用性のある知見の構築を目指す。また、調査手法についても、インタビューだけでなく、参与観察やアンケート調査など多角的な手法を取り入れ、質的・量的データを融合させた分析を進めたい。学会発表に向けた学内でのプレ発表や教員からの継続的な指導体制を整備し、学生のプレゼンテーション力の向上を図るとともに、ポスター発表の成果を他自治体との意見交換や提言に活用できるよう、自治体職員との連携体制も強化したい。さらに、プロジェクトの成果と経験を後輩に継承するための記録やマニュアル化も検討し、持続可能な学生主体の地域実践モデルとして定着させていく。

部活動改革に向けた戦略的提携に関する研究：
F県A市の官民提携事業に着目して
1 研究の背景
2 先行研究の検討
3 研究目的
4 研究方法
5 結果
6 結論



事業プラン名		離島（大島地区）の健康づくり事業
九共大	担当者	花田　道子
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	宗像市役所
	責任者	健康福祉部　健康課　健康サポート係　山本主幹
事業実施日・回数		2025 年 2 月 22 日（土）《 全１回 》
実施場所		大島福祉センター「ふれ愛センター」
事業対象者･参加人数		事業対象者：20 名 参加人数（学生ボランティア）：7 名
経　　費		地域連携推進センター/宗像市/保健所（謝金等）
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 宗像市では、離島における市民の健康づくりの支援を目的に、大島地区で体力測定や健康講話が行われている。大島地区市民の健康づくり支援を目的とした活動が実施されている。「健康測定とレクリエーション」を今年度も「みんなで楽しく体を動かすこと」を目的にプログラムを提供した。また、大島学園の生徒さんが島の高齢者のために作成した【大島体操】を動画で見ながら一緒に行なった。「体力測定結果の説明」や「運動面の効果」などについてお伝えした後、学生たちが楽しい「レクリエーション」や「モルック」を実際に行なった。 **２．実績** 運動による健康づくりの指導や誰でも行えるアダプテッドスポーツ（モルック）で楽しく身体を動かした。また、島民が持ち帰って自宅でも行えるような運動（筋トレなど）の伝達や大島体操について、解説を交えながら一緒に行った。 測定（InBody、開眼片足立ち）と測定後の説明を行った。 **３．効果** 今回の活動は、終始和やかな雰囲気の中で進められ、大学生との交流を通じて、大島島民の健康づくりや生きがいづくりに貢献することができた。学生たちは、高齢者の方々から測定結果に関する質問を受けることで、大学で学んでいる知識を実践的に活かし、地域に貢献できることを実感するとともに、健康課題について深く理解する貴重な機会となった。さらに、宗像市役所健康福祉部健康課との連携が強化され、今後のより充実した活動の展開につながる重要な一歩となった。
学生の声		今回の大島ボランティアに参加して、島民の方とお話させていただいたことで健康について考える良い機会になりました。食生活や運動を意識的に行っている方が多く、心地よい運動を継続することの大切さに改めて気づくことができました。これから自分自身も実践していきたいです。私の担当は大島体操でしたが、学生と島民の方の一体感と大島学園の生徒さんの気持ちのこもった体操はとても素敵でした。世代間交流を行うことで自分たち学生も元気をもらうことができ、とても良い経験になりました。大変貴重な経験をさせていただきありがとうございました。【スポーツ学部　4 年　小宮雅史】
今後の改善内容及び展開		「健康測定とレクリエーション」の活動は、地域の健康づくりに貢献する素晴らしい取り組みであり、今後の改善と展開については、体力測定の結果をデータ化し、参加者にフィードバックを提供することで、個々の健康状態の把握と改善につなげれるように測定データを活用していくこと。それらを継続的にフォローアップできるように測定結果をもとに、個別の健康アドバイスや運動プログラムを提供し、長期的な健康維持を支援できると良い。また、この事業は大学生と高齢者との多世代交流の促進にも繋がっており、さらに子どもや若者も参加できる交流プログラムを導入し、世代間交流と健康維持のコラボレーションも良いのではなかろうか。今後も、宗像市役所健康福祉部健康課との連携を深めながら、宗像市の高齢者の生きがい、健康、ふれあい、社会参加の促進に貢献したい。

モルック

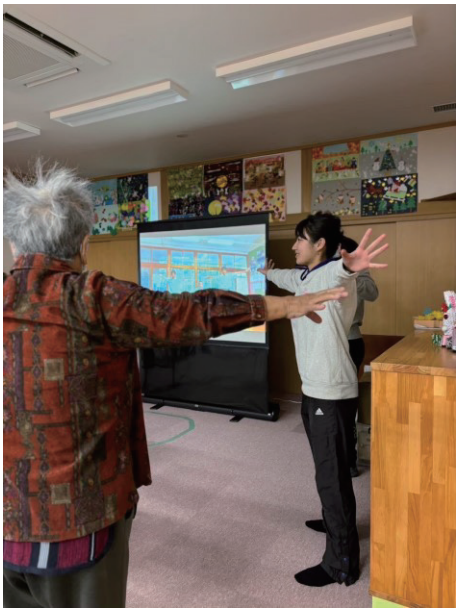
レクリエーション

大島体操

今回参加された島民の皆さんは運動に積極的に取り組んでいる方が多いことから、体力的にも余裕のある方が多い印象でした！またお話しする中で島民の方々のあたたかさに触れることができ、自分自身も元気をもらえました！

スポーツ学部 4 年　堀　愛音

測定結果の説明



事業プラン名		社教センターフェスティバル
九共大	担当者	花田　道子、アダプテッド・スポーツ研究部
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	福岡県立社会教育総合センター/福岡県教育委員会
	責任者	福岡県立社会教育総合センター　調査・研修班
事業実施日・回数		2024 年 11 月 10 日（日）10：00～15：00《 全１回 》
実施場所		福岡県立社会教育総合センター
事業対象者･参加人数		事業対象者：700 名（150 家族以上） 参加人数（学生ボランティア）：13 名
経　　費		地域連携推進センター/福岡県立社会教育総合センター（謝金等）
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 地域に開かれた施設づくりの一環として、福岡県立社会教育総合センターの施設や自然を活用した様々な創作活動・体験活動等を地域住民へ提供し、同センターの事業等への理解を深めるとともに、ボランティアの育成を図る。プログラム対象は創作活動及び体験活動に興味のある子どもや大人など、誰でも自由に参加可能。 今年は、創立 40 周年を記念してステージ発表が行われた。毎年 700 名・150 家族以上が来場する人気のイベントで、木工工作や火おこし体験、化学工作教室のほか、年齢や障がいの有無に関わらず楽しめるアダプテッド・スポーツの体験、動物とのふれあい体験など、様々な活動が展開される。 **２．実績** 年齢や障がいの有無に関わらず楽しめる「アダプテッド・スポーツ」の体験ブースを九州共立大学が担当させて頂いた。誰でも楽しめるスポーツ（ボッチャ/スライドサッカー/わなげ/ストラックアウト）体験コーナーを準備して、プログラム参加児童（160 名）へのサポートを実施した。 **３．効果** 子どもたちは、学生たちが準備したさまざまな体験ブースを何度も回りながら、楽しそうに挑戦を繰り返していた。学生たちは、積極的に取り組む子どもたちに温かく声をかけるだけでなく、躊躇している子どもには優しく寄り添いながら、挑戦するきっかけを作っていた。中には、子どもへの関わり方が非常に上手な学生もおり、その姿を見て学んでいる学生も多くいた。こうした交流を通じて、子どもたちが主体的に実践へと踏み出していくプロセスを、学生自身が体験的に学ぶ貴重な機会となった。 センター職員と連携・協働してプログラムを効果的に実施するなど、本事業を成功させる原動力になった。
学生の声		本事業プランに参加したアダプテッド・スポーツ研究部の学生の多くは、将来教員を志す者であり、子どもたちに「スポーツの楽しさ」をどのように伝えるべきかを実践的に学ぶ貴重な機会となった。活動を通じて、スポーツの魅力を届ける喜びを感じると同時に、異世代との関わりの奥深さや難しさにも直面し、多くの学びを得ることができた。この充実した経験を糧に、今後の教育活動への意欲を一層高めることができたようである。
今後の改善内容及び展開		本事業は毎年、学生ボランティアの協力を得ながら実施されており、子どもたちの理解を深めるとともに、スポーツの楽しさをどのように提供できるかを探求する重要な取り組みとなっている。特に、パラリンピック種目の「ボッチャ」体験を取り入れることで、スポーツの多様性を伝え、子どもたちが障がいの有無に関わらず楽しめる競技の魅力を身近に感じられる機会を提供した。今後の改善と展開としては、体験型プログラムの充実として、「ボッチャ」のほかにも、車いすバスケットボールやゴールボールなど、他のパラスポーツを体験できる機会を増やし、子どもたちが幅広いスポーツに触れられる環境を整えることや学生ボランティア向けの研修を強化し、子どもたちへの関わり方や指導のポイントを学ぶ機会を設けることで、より効果的な支援を目指したい。このような取り組みを進めることで、子どもたちがスポーツを通じて多様な価値観に触れ、主体的に楽しむ機会を増やしていくことに貢献したい。

スライドサッカー

「がんばるぞー！」

ストラックアウト

わなげ

社教センター祝 40 周年

「アダプテッド・スポーツ体験」

↓　ボッチャ

事業プラン名		第 41 回中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会
九共大	担当者	山田　明
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	福岡県立社会教育総合センター
	責任者	所長、福岡県教育庁教育委員会
事業実施日・回数		令和 6 年 5 月 18 日（土曜日）～19 日（日曜日）
実施場所		福岡県立社会教育総合センター
事業対象者･参加人数		中国･四国･九州地区の生涯教育関係者約 400 名／九州共立大学学生ボランティア 10 名
経　　費		福岡県教育庁教育委員会（学生ボランティアへの謝金及び参加費免除等） 九州共立大学（学生ボランティア参加必要経費及び交通費バス代）
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 本交流会は、中国・四国・九州地区各県の生涯教育の現場で、「まちづくり」･「人づくり」･「つながりづくり」に取り組んでいる関係者が一堂に会し、各県教育委員会事務局が推薦する実践事例発表（24 事例）を通して相互交流を図り生涯教育（学習）の振興に寄与している。学生においては、本交流会の運営サポートボランティアを通して生き抜く力である主体的社会参加・参画の資質能力、いわゆる市民性（シティズンシップ）を涵養することを目的とする。大学としては、社会貢献という使命を果たすことを目指すものである。 **2．実績** 西日本最大級の生涯教育（学習）関連プログラムの成功に大きく貢献した。受付・参加者の相談対応・分科会運営サポート・会場設営等を経験した。大会参加者が実数で約 400 名、2 日間の延べ数で 600 名近くなる規模の大きな大会であり、学生の運営ボランティアが不可欠の存在である。学生は主体的かつ積極的で丁寧な働きをしており、参加者、大会関係者、スタッフから賞賛と感謝をされた。 **3．効果** 学生ボランティアは、生涯教育（学習）の関係者（自治体職員、教員等の公務員、一般の実践者、ボランティア等）と交流しながら、一緒に力を合わせて協働しながら大会運営を成功裏に導く経験をした。その過程でコミュニケーション能力、情報収集力、課題解決能力などの市民性（シティズンシップ）の涵養体得にも効果があったようだ。 なお、本プログラムは、九州共立大学と福岡県立社会教育総合センターとの包括的地域連携推進協定に基づく事業であり、本学においては大学の社会貢献という使命、福岡県立社会教育総合センターには大会の成功という相互メリットの効果があった。
学生の声		活動終了後に実施された振り返りの会（18 日）では参加学生が一人ずつ、活動後の感想を大会スタッフの前で述べた。2 日間にわたるボランティア経験から大会サポートを通した充実感（達成感）を感じたこと、多くの人との交流で対話やコミュニケーションが上達したこと、大会参加者からお礼や感謝をされ、自己肯定感が高まったことなどが語られた。また参加者や大会スタッフなどから、キャリアや進路に関して多くの有益な情報が得られたことも学生のメリットになったようである。
今後の改善内容及び展開		本事業プランは毎年、九州共立大学の学生が運営サポートしている大会である。そのサポートの内容である受付・参加者の相談対応・分科会運営サポート・会場設営等に関して、事前研修をさらに充実させて本大会に臨ませれば、より学修効果のある活動になると考えられる。あわせて振り返りも計画的に準備しておきたい。ボランティアを単なる労働力として提供するのではなく、学生の真の学びにつながるようなプログラムとしたい。その対策として企画段階からの参加も視野に入れ、主催者の福岡県教育庁教育委員会、福岡県立社会教育総合センターとも連携を密にし、次年度の事業に向けて計画を進めたいと考えている。

中国・四国・九州地区
生涯教育実践研究交流会
第41回大会

オークション
特産品 受付

事業プラン名		ひこさんミドルキャンプ（スポーツ社会教育実習）
九共大	担当者	山田　明
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	福岡県立英彦山青年の家
	責任者	所長
事業実施日・回数		令和 6 年 6 月 8 日（土）・9 日（日）
実施場所		福岡県立英彦山青年の家
事業対象者･参加人数		小学生 30 名／九州共立大学　学生 13 名
経　　費		参加者自己負担、交通費（バス経費）のみ九州共立大学地域連携推進センター負担
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 本学と福岡県立英彦山青年の家との包括的地域連携協定に基づく事業である。本学スポーツ学部のスポーツ社会教育実習と学生ボランティアを兼ねたプログラムでもある。目的は、プログラム参加学生が青少年教育施設（社会教育施設）において社会教育の目指す規律・協働・友愛の精神の涵養、実習先での諸活動を通した社会教育施設運営を体得することである。 **2．実績** 福岡県立英彦山青年の家の利用者である小学生キャンプについて、学生はプログラムのサポートをつとめた。青年の家の主催事業の実施に貢献するとともに、小学生の学びに大きく寄与した。学生は規律・協働・友愛の精神の重要性を確認し、社会教育施設の運営を学んだ。大学としては、福岡県立英彦山青年の家との包括的地域連携協定に基づく事業を支援することで、大学の社会貢献という使命を果たした。 **3．効果** 参加学生の学び（社会教育施設運営）、小学生キャンプからの学び（子どもの体験活動）、福岡県立英彦山青年の家の事業及び大学の社会貢献など相互メリットという効果を生んでいる。なお本プログラムは、社会教育主事任用課程の取得に必要な科目を学ぶ実習でもあり、学生のキャリアアップにもつながっている。
学生の声		九州共立大学広報誌 LIBERTY（第 7 号）にて、本プログラム参加学生のコメントが掲載されているので、以下を参照されたい。 ・参加した小学生や施設職員の方と関わり、コミュニケーションスキルの向上、火おこしや調理体験から安全についても考えを深め、危機管理の力が身についたと思います。 ・今回のボランティア体験で小学生と交流し、広い視野から見守るスキルと異世代とコミュニケーションの難しさも経験した貴重な学びができました。 ・小学生へのサポートすべてをボランティアが行うのではなく、適格なアドバイスや指導助言を通して、お互いにコミュニケーションをとりあう雰囲気づくりや友達同志の関係を深めるようなサポートが大事だと学びました。 ・カローリングというニュースポーツを担当しました。この種目はチーム戦であり、小学生は互いにコミュニケーションをとりながら相手に勝つための戦略を立て、周りの人との協調性を高めていました。一つのスポーツから多くのことを学ぶことができることを実感しました。
今後の改善内容及び展開		次年度のプログラムについては、キャンプ指導の理論と実践を事前研修としてさらに充実させたい。本プログラムは小学生を対象としており、事故防止の観点から危機管理の理論と実践を準備することも必要である。キャンプ専門の指導を含めた事前準備（指導）計画を、キャンプインストラクター、教員、学生と一緒に作成したい。学生、教員とも、本年度の振り返りから多くのことを学んでおり、次年度の研修がより充実したものになるように展開していく。

令和6年6月8日（土）～9日（日）
ワンヘルスひこさんミドルキャンプ

令和6年度　英彦山青年の家　主催事業
「ワンヘルス」
ひこさんミドルキャンプ
開催日
6.8 sat ~6.9 sun
そこのきみ！英彦山の自然知ってみない？
福岡県立英彦山青年の家
日　程
1日目　受付　10：00～10：30
・レクリエーション、クイズで学ぶワンヘルス
・テント設営・ランタンづくり
・スタミナ満点スタ丼つくり
・星空観察
2日目
・ビギナースワンヘルス
～今の自分たちにできること～
・英彦山探検ツアー
14：30 解散（予定）
ワンヘルス（One Health）＝「ひとつの健康」とは？
人と動物、そして環境の健康は1つと考えて守っていくために、みんなで考えて行動すること。
ワンヘルスミドルキャンプでは、野外体験活動を通して、自然のすばらしさや自然環境を守るために大切なことを学びます。
FUKUOKA ONE HEALTH
募集内容
【対　象】福岡県在住の小学3・4年生　24名程度
（申し込み多数の場合は抽選になります。）
【申込方法】下記QRコードまたは英彦山青年の家ホームページよりお申込みです。
【申込期間】令和6年4月29日（月）～令和6年5月20日（月）12：00まで
【参加費】3,000円（銀行振込でのお支払いです。）
※集合、解散は英彦山青年の家です。
福岡県立英彦山青年の家
〒824-0721　☎0947・85・0101
福岡県田川郡添田町英彦山32-18
申込QRコード
公式Instagram
公式ホームページ

事業プラン名		「拝命　社長秘書」―社長に同行する 2 日間―
九共大	担当者	尾上 百合加
	所　属	経済学部
連携機関	機関名	遠賀信用金庫
	責任者	地域貢献課長　中谷 満俊 氏
事業実施日・回数		2024 年 8 月～12 月　≪全 5 回≫
実施場所		北九州市内
事業対象者･参加人数		事業対象者：遠賀信用金庫、㈱グラノ 24K、㈱唐十、(有)ファイン 参加者数　：経済学部　3 名、
経　　費		遠賀信用金庫・地域連携推進センター経常運営費
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 在学中に地域企業での就業体験を通じて、学生が地元企業の魅力や強みを直接知る機会を提供すること、また本事業を通じて大学と地域企業とのネットワーク強化を図ることを目的として、遠賀信用金庫と本学の連携協定に基づき本事業を実施した。募集の結果、本学から 3 名の学生が参加した。 **2．実績** 第 1 回（8 月 10 日） 遠賀信用金庫営業本部にて事前研修会を実施。本事業の全体説明に加え、企業が求める人材像や「地域ではたらくこと」をテーマにした先輩社員によるパネルディスカッション、ビジネスマナー・コミュニケーション研修などを行った。 第 2・3 回（夏季休暇中） 大学の夏休み期間中に 2 日間、学生が地域企業の経営者に同行し、経営理念や経営手法に触れた。これにより、通常のインターンシップでは得がたい、より実践的な体験が提供された。 第 4 回（10 月 19 日） プレゼン研修を実施。成果発表会に向けて、内容の整理や発表スキルの向上を図った。 第 5 回（12 月 17 日） 成果発表会を開催し、受け入れ企業の社長を招いて、各学生が体験から得た学びを報告・発表した。発表終了後には懇親会を開き、学生と企業の交流を深める機会となった。 **3．効果** 学生は地域企業での実践的な体験を通じて、地元企業の魅力や役割への理解を深め、地元就職への意識向上につながった。また、研修や発表会を通じて、ビジネスマナーやコミュニケーション力の向上も見られた。大学と企業の連携強化にも寄与し、今後のネットワーク形成への基盤が築かれたと感じられる。
学生の声		「実際に社長の仕事内容に直接触れる中で、従業員との積極的な意思疎通や、細やかな心配りを常に意識されていることに驚かされた」、また「経営者は常に新たな挑戦を続けている」ことを実感し、視野が大きく広がる貴重な 2 日間の学びとなったと報告があった。
今後の改善内容及び展開		大学生が実社会の現場で学びを得ることは、教室内の学びを深化させ、将来のキャリア形成にも大きく寄与する重要な機会である。本事業は、そうした学びの場を地元の信用金庫が中心となって構築してくださった点に大きな意義があり、深く感謝している。今後もこの取り組みを継続・発展させ、さらに多くの学生が地域と関わりながら成長できる機会を広げていきたい。

「拝命　社長秘書！」報告会
2024 in 九州国際大学

参加した理由
地域創造学科に所属
地域活性化について学んでいる
地域に密着した企業の仕事を
体験してみたい！

事業プラン名		スポーツ安全協会助成事業「令和 6 年度スポーツ活動等普及奨励助成事業」 「九州共立大学による「自律性」と「安全性」を完備したアダプテッド・スポーツ・コミュニティの開発支援」
九共大	担当者	松﨑　淳
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	公益財団法人スポーツ安全協会
	責任者	助成事業担当者
事業実施日・回数		2024 年 4 月～2025 年 3 月（全５回）
実施場所		鶴鳴記念館、連携市町における公共施設
事業対象者･参加人数		事業対象者：地域住民 参加人数：391 名（市民）、78 名（大学生・教員）
経　　費		スポーツ安全協会（令和 6 年度スポーツ活動等普及奨励助成事業）助成金
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 本事業は、大学のスポーツ資源（人材・施設・教育研究）を活用し、6 市町と連携してアダプテッド・スポーツ・アドミニストレーター（ASA）の育成と、アダプテッド・スポーツ・クラブ（ASC）の設立を支援するものである。世代間交流を促進することにより、年齢や障がいの有無に関わらず、誰もが参加できるスポーツコミュニティの形成を目指している。令和 6 年度は、大学を拠点とした教室や運動会の実施に加え、各市町で出前講座・指導者養成講座を展開し、基盤整備を行っている。また、学生による新種目の開発や地域住民との協働を通じ、創造性と地域貢献意識の醸成も図られている。 **２．実績** 令和 6 年度は、大学内で 3 回のアダプテッド・スポーツ教室と地域対抗フェスティバルを開催し、延べ 189 名の地域住民と学生と教員が参加した。出前講座と指導者養成講座を各市町で実施し、のべ 150 名が参加した。学生・教員の派遣も積極的に行われ、年間 30 名以上の学生が地域でのプログラム運営に関与。また、新たに創出した種目「身体を使ったオセロ」も導入され、参加者から高い評価を得ている。 **３．効果** 地域住民のスポーツ参加機会が拡大し、特にこれまで運動機会の少なかった高齢者や障がい者を含む層に、参加意欲の高まりが見られた。参加者アンケートでは 85%以上が「満足」「やや満足」と回答し、身体活動への心理的ハードルが下がったことがうかがえる。教室・講座を通じて ASA 候補者の育成が始まり、地域内での実践体制の芽が育ちつつある点も本事業の大きな成果である。また、アダプテッド・スポーツの魅力や可能性が可視化されたことで、各市町の行政担当者やスポーツ推進委員からも事業の継続と発展に対する前向きな意見が寄せられ、地域全体での取り組み機運が高まりつつある。さらに、大学生の参画が地域に新たな活力をもたらし、持続的な地域共生社会の実現に寄与している。
学生の声		参加学生からは「自分たちが企画・運営したプログラムが地域の笑顔につながった」「スポーツの可能性と大学の社会的役割を実感した」といった声が多く寄せられた。また、「運動が苦手な人も楽しめるスポーツづくりは新鮮だった」「地域の方々との交流を通じて視野が広がった」との感想もあり、単なるボランティアにとどまらない実践的な学びの場となった。さらに、「準備段階で地域ニーズを調査・反映する難しさや重要性を体験し、実践的な課題解決能力が養われた」「異なる学年や専攻の学生と協働する中で、コミュニケーション力やリーダーシップが自然と培われた」といった学修的成長の報告もあり、大学教育としての意義も大きかった。
今後の改善内容及び展開		今後は参加者数のさらなる拡大が課題であり、SNS や地域メディアを活用した広報体制の強化が必要である。また、学生の参加意欲を高めるため、授業との連携や単位認定など動機付けの仕組み作りが求められる。令和 7 年度以降は市町主導への移行を進め、プログラムの運営を地域に根付かせることで、持続可能なアダプテッド・スポーツ・コミュニティの形成を目指す。加えて、プログラムの多様化も重要であり、シニア層向けの軽運動や子ども向けの遊び要素を取り入れた種目など、世代ごとの関心やニーズに応じた活動展開が求められる。さらには、ASC（アダプテッド・スポーツ・クラブ）の活動を地域の恒例行事として定着させ、参加者同士の継続的なつながりを生む仕組みづくりも必要である。こうした多角的な展開によって、地域のスポーツ文化の厚みと持続性を高めていくことが期待される。

KYORITSU

事業プラン名		第１回 東アジアふうせんバレーボール大会
九共大	担当者	花田　道子、九州共立大学女子バレーボール部、アダプテッド・スポーツ研究部
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	日本ふうせんバレーボール協会
	責任者	会長　林　英之
事業実施日・回数		2024 年 12 月 1 日（日）《 全１回 》
実施場所		北九州市立総合体育館
事業対象者･参加人数		事業対象者：46 チーム（約 500 名） 参加人数（学生ボランティア）：九州共立大学女子バレーボール部　12 名 アダプテッド・スポーツ研究部　　5 名
経　　費		地域連携推進センター
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 1989(平成元)年に北九州市において「障がい者の完全参加と平等」をコンセプトとして開発された「ふうせんバレーボール」の普及を通じ、障がい者の社会参加を進め、ふれあいの和を広げながら「誰もが支えあって生きる社会の実現」を目指した大会である。 **２．実績** 昨年度まで「全国ふうせんバレーボール大会」として開催され、34 回の歴史を積み重ねてきた本大会は、近年、韓国、香港、台湾など東アジアのチームの参加が増加し、国際的な広がりを見せている。そして今回、さらなる発展を目指し、「第 1 回東アジアふうせんバレーボール大会」と名称を改め、新たなステージへと歩みを進めることとなった。本大会では、東アジア各国・地域の選手が集い、熱戦が繰り広げられ、競技を通じてスポーツの楽しさを共有するとともに、国際交流の貴重な機会となった。大会の成功は、参加者の情熱とボランティアの協力によるものであり、今後もさらなる発展が期待される。学生たちは事前に研修を行い、当日はバレーボール部は副審、アダプテッド・スポーツ研究部は記録係として貢献した。 **３．効果** 学生たちは共生社会の実現に貢献するとともに、障がいに対する理解を深め、「スポーツはみんなのものであること」を実感することができた。他のボランティアの人たちと連携・協働して大会をサポートするなど、本大会を成功させる原動力になった。
学生の声		記録員として選手の試合を支えました。多様性を理解し合い１つのチームとしてふうせんバレーに真剣に取り組む姿に強く心を打たれました。また、試合中には自分のチームだけでなく良いプレーをした時には全員が称賛し合うような場面が多く見られ、心の温まる大会でした。　【アダプテッド・スポーツ研究部　堀　愛音】 ふうせんバレーボールを間近で見させていただきどの試合も白熱した戦いですごく審判をしていて楽しかったです。どのチームもチームワークがよく、この大会のためにたくさん練習をされてこられたんだなと思いました。コートの中で色々な言葉が飛び交っており、年齢も様々でコミュニケーションの取り方が上手で、なかなかボールが落ちず、長いラリーになることが多くて、私たちもバレーボールをやっているので、そういうところを見習ってやっていかないといけないなと思いました。 【九州共立大学女子バレーボール部　下川りんこ】
今後の改善内容及び展開		ふうせんとは言え、かなりのスピードのあるアタックやサーブ展開がなされるため、バレーボール経験者でもジャッジが難しい。昨年度より記録係の依頼もあったことから、ルールの把握と記録方法を事前に習得しておく必要がある。 誰もが楽しめるスポーツとして一緒に楽しむことができ、支える側として審判スキルを身に付けた「人の役に立ちたい」と思える学生を育てたい。

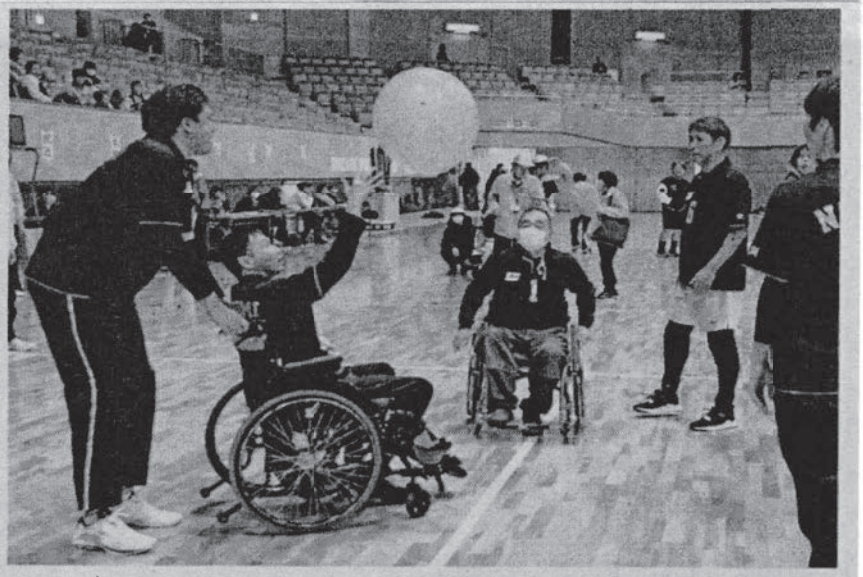
第1回 東アジアふうせんバレーボール大会

2024/12/1 北九州市立総合体育館

2024年(令和6年)12月2日(月曜日)　読売新聞

北九州
折尾　北九州総本部
筑豊　行橋
豊前
西部本社
久留米
京築

北九州総本部
〒802-8571
北九州市小倉北区米町2-2-1
新小倉ビル4階
☎093-531-5131　Fax531-2414
s-syaka2@yomiuri.com
行橋通信部
0930-22-1254　Fax22-1381
豊前通信部
0979-82-4747　Fax82-7242
折尾通信部
093-693-1750　Fax693-1751
購読・配達の問い合わせは
0120-4343-81
北九州読売会　093-562-7377
筑豊京築読売会　0947-44-0582
【広　告】093-551-0285
【折り込み】093-921-5606
【旅　行】読売旅行西日本販売センター　093-521-5511



▲息の合ったプレーを見せる出場者たち

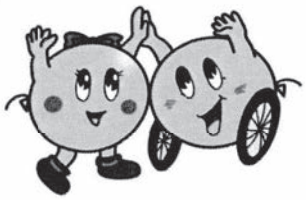
笑顔でふうせんバレー

北九州　東アジア大会に46チーム

風船を使って障害者と健常者がチームを組んで楽しむ「第1回東アジアふうせんバレーボール大会」が1日、北九州市八幡東区の市立総合体育館で開かれた。同市や香港など国内外の46チーム、計約500人が出場し、笑顔で汗を流した。

ふうせんバレーは、1989年に同市で考案されたスポーツ。鈴を2個入れた直径40㌢の風船を全員が少なくとも1回は触れ、10回以内で相手コートに返す。これまでは全国大会として34回開催されてきたが、例年東アジア地域から参加チームがあったことを受け、今回から「東アジア大会」と名称を変更した。

出場者たちは、予選リーグと決勝トーナメントで、互いに声を掛け合いながら、懸命に風船を追いかけていた。参加した北九州市若松区の有田裕美さん(69)は「みんなで協力してプレーでき、楽しかった」と話していた。



事業プラン名		地島プロジェクト
九共大	担当者	山田　明
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	宗像市地島応援団（福岡県庁職員及び宗像市役所職員有志）
	責任者	団長
事業実施日・回数		1 回（令和 6 年 11 月 10 日）
実施場所		地島（宗像市）
事業対象者･参加人数		地島島民・地島応援団／九州共立大学　学生ボランティア 13 名
経　　費		地島応援団（福岡県地域振興補助金）、九州共立大学（交通費バス代）
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 過疎化が進む離島である地島（宗像市）の地域活性化を目的に、学生の視点で取り組んだボランティアである。本プロジェクトは毎年実施しており、今年度は地島産サツマイモの収穫、島民及び地島小学校生徒との交流を通して地域活性化に貢献した。学生には社会を生き抜く資質能力、いわゆる市民性（シティズンシップ）の涵養を目的とした。島民の方には島おこしのサポートによる島の賑わいづくり、大学としては社会貢献の使命を果たすことを目的とした。 **2．実績** 学生ボランティアは、地島小学校での次世代育成プログラムの企画・運営を経験した。また地島産の良質なサツマイモを収穫（1 トン）し、その製品化を島民の方と検討する会も開催した。地島応援団との協働で、将来的見通しを持った活動につながるプロジェクトであった。なお、本学の学生は、地島応援団をサポートする目的で、KKK（九州共立大学）地島応援サポート隊を結成しプロジェクトの運営に大きな力となった。 **3．効果** 学生が主体となった活動を通して、島民とのふれあい、島おこしという地域活性化に貢献した。人口減少、少子高齢化が顕著な離島において地域課題は山積している。ボランティアとして学生がサポートに入り課題を共有、その解決に向けて取り組んでいくところに島民への活力を与える効果があったようだ。学生においても、現実の社会課題に触れ、机上では学ぶことができない学びの効果（対話力、コミュニケーション能力、地域社会への認識など）があった。大学おいても、宗像市（本学との包括的地域連携協定締結先）への社会貢献という大学の使命を果たすことにつながった。
学生の声		九州共立大学広報誌 LIERTY（8 号）に掲載された学生のコメントを以下に紹介する。 ・地島小学校の可愛い生徒と仲良くなれ、年配の方々を含めて多くの参加者と交流する中で地島のこと、サツマイモのこと、宗像の歴史など多くの学びがありました。ボランティアの楽しさとそこから得られる力を確認でき、充実感のある活動でした。 ・活動を通してたくさんの方と会話ができ、地域の温かさを感じました。地島での人と人のつながりの深さを知り、普段の生活ではできない経験ができました。 ・ボランティアは相手のための活動ですが、自分のためでもあると思いました。人と人との出会いが自分の新しい力になったからです。これからもボランティアに参加したいと思っています。
今後の改善内容及び展開		次年度も継続して取り組んでいく。地島小学校における次世代育成プログラム、地島産サツマイモの商品化をより充実したものとする。学生の事前準備にも力を入れたい。島の産業を興すという極めて困難な課題であるが、宗像市地島応援団と協働しながら、サツマイモの商品化及びプロモーションを学生の視点からサポートできるような準備を計画する。

地島応援団

事業プラン名		小学生のためのレベルアップ短期水泳教室
九共大	担当者	森　誠護、重枝　武司
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	九州共立大学地域連携推進センター
	責任者	地域連携推進センター長
事業実施日・回数		［夏期］2024 年 8 月 5・6・7・8 日［春期］2025 年 3 月 24・25・26・27 日
実施場所		福原学園屋内公認プール
事業対象者･参加人数		九州共立大学近隣に在住の小学 1～6 年生 ［夏期］32 名 ［冬期］37 名
経　　費		学内特別教育研究費
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 近年、社会環境や生活様式の変化などにより、子どもの体力の二極化現象が生じている。水泳においては、スイミングクラブが増加し、水泳を習う機会はあるものの、学校体育で水泳を教わる機会や時間は減少していることから、水泳能力においても二極化が進んでいる。研究代表者らは令和 3 年度から「小学生の泳力向上を目的とした水泳教室」を実施することで学校教育での水泳指導の課題を明らかにし、短期水泳プログラムが児童の泳力向上に及ぼす効果について検討している。本プロジェクトでは、泳力向上を目的とした短期水泳教室と普及を目的とした水泳イベントを開催し、学校体育における水泳指導の課題を明らかにすることを目的とした。 **2．実績** 本研究では、令和 4 年度に作成した短期間水泳指導プログラムを夏期（8 月）及び春期（3 月）にそれぞれ 3 日間実施した。水泳教室前後には客観的評価（泳力カルテ）を行い、受講後に参加者及びその保護者に対してアンケート調査を行った。また、その翌日（4 日目）には、水泳教室参加者及び参加者以外からも参加者を募り、水泳の普及を目的とした水泳イベント「スイムフェスタ」を実施した。なお、スイムフェスタのみの参加者には、水泳教室と同様にアンケート調査を実施した。 水泳教室の参加者は、夏期が 32 名、春期が 37 名であった。スイムフェスタの参加者は、夏期が 18 名、春期が 18 名であり、このうち水泳教室とスイムフェスタの両方に参加した児童は、夏期が 13 名、春期が 17 名であった。 **3．効果** 水泳教室の開始時と終了時に行った泳力カルテでは、参加者の全員が泳力を向上しており、短期間でも十分な成果を得られることが明らかとなった。また、受講生に対して受講後に行ったアンケートでも「3 日間で上手になったと思いますか？」の質問に対して、「はい」回答を得られたものが、夏期 89%、春期 96%であり、ほとんどの受講生が泳力の向上を実感することができていた。また、自由記述の感想において、「また参加したい」「もっと上手になりたい」など肯定的な意見が多く見られた。なお、保護者に対して行ったアンケートにおいて、「今後、この教室に期待することは何ですか」の質問に対して、「引き続き開催してほしい」「また参加したい」「毎月開催してほしい」など、継続的な指導を求める意見が多く見られた。 今回の結果から、3 日間の短期水泳教室でも十分に児童の泳力向上が確認でき、児童自身も泳力の向上を自覚することができていた。また、保護者のニーズとしては、このような短期水泳教室を継続的に実施することを求める意見が多く見られたことから、今後も継続することで児童の泳力も向上し、地域との連携をさらに深めることができると考えられる。
学生の声		本プロジェクトには、九州共立大学水泳部に所属する学生（夏期 10 名、春期 11 名）にアシスタントコーチとして参加してもらった。なお、水泳教室前には指導担当の配置や指導内容に関する打ち合わせを行った。水泳教室後には学生にもアンケートを実施し「水泳の楽しさを知ってもらうことを頭に入れて指導した」「分かりやすい言葉に置き換えるのが難しかった。」という意見が得られた。受講生や保護者からは学生スタッフに対する好意的な意見が多く得られた。
今後の改善内容及び展開		本教室で実施した指導方法については十分な内容が指導できていたため、小学校における水泳指導においても十分活用できる内容であると考えられる。これは、本教室では水泳専門の教員及び水泳部の大学生で指導を実施したため、より専門的な指導方法を小学校の教員に対して教授していくことが必要である。

事業プラン名		折尾イルミネーション
九共大	担当者	顧問　木村美奈子　・学生統括 佐藤真愛
	所　属	SDGs チャレンジアクション研究会
連携機関	機関名	折尾イルミネーション実行委員会
	責任者	折尾商連理事長　安藤　進一　氏
事業実施日・回数		2024 年 11 月 30 日～2025 年 1 月 30 日
実施場所		八幡西区折尾駅駅前広場・学園大通り
事業対象者･参加人数		事業対象者：市民
経　　費		なし
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 今年度は昨年に引き続き、折尾駅駅前広場を中心に、折尾駅北側広場に植樹されたシンボルツリーを電飾し、学生たちが考案したインスタスポットを設置する。 創造的なイルミネーションを設置することにより、日常とは異なる光の演出により、新しい折尾のまちの魅力を向上させ、折尾のイルミネーションの存在がまちの関係人口を増やし、人と人が交流する場を創出する。 **2．実績** 昨年度に新しくなった折尾駅前を活用するため、本年度も引き続き折尾駅駅前広場をメイン会場とし、折尾駅前広場には地元の学生が考案したインスタスポットを設置した。11 月 30 日に点灯式を行い、人と人が交流する場・機会を設けた。インスタスポットには、協賛をいただいた若松ボートレースのマスコットキャラクターである「かっぱくん」をイルミネーションで作成し、より親しみやすさが生まれるようにした。イルミネーション点灯式のトリは北九州市出身アーティストである肌埜綾将さんのミニライブを行い、大いに盛り上がった点灯式となった。 北側に植樹されたシンボルツリー2 本にはクリスマスツリーを連想させるようにイルミネーションを配置し、新しいシンボルが折尾のまちを明るく照らした。 **3．効果** 昨年に引き続き、折尾駅前でのイルミネーションを行い、大掛かりなイルミネーションを設置することができた。また学生たち考案のインスタスポットは、通勤通学途中の駅利用者及び周辺地区の地元の方々が写真を撮影していた。点灯式では、折尾周辺にお店を構える飲食店が夜店を開店させ、寒い夜をあたためるカレーライス、ホットドリンク、おでんなどが売られ、多くの市民が楽しんでくださった。
学生の声		毎年行われる折尾駅周辺のイルミネーション設置と点灯式が今年度も新駅舎の折尾駅前広場で開催された。今回は、九州女子大学、産業医科大学、北九州市立大学の学生たちとチームを作り、どのように飾り付けをすれば折尾駅前がきれいに彩ることができるのかを話し合いながら飾り付けを行い、私たちもワイワイ楽しく活動できた。また来年度もバージョンアップしたイルミネーションができるように頑張っていきたい。
今後の改善内容及び展開		折尾のイルミネーションは、従来、地元商連が主導して折尾駅から南側の堀川沿いと学園大通り沿いに飾ったイルミネーションがいつしか折尾のまちの冬の景色を彩る風物詩となった。折尾駅の新駅舎が整備された 2023 年度からは行政も関与して駅前広場を基点とした大掛かりなイルミネーションと発展してきた。点灯式には地元の飲食店や学生たちの企画した夜店を出店し、折尾のまちの新しいイベントとして成長してきている。この折尾のまちのイルミネーションをますます折尾の風物詩として成長させていくためには、他市町で開催されるイルミネーションと差別化できるような「折尾らしさ」を探究し、年末年始に折尾のまちを訪れる人たちに「折尾」を楽しんでもらえるような仕掛けづくりを考えたい。またエネルギーを消費することから、環境に配慮したイルミネーションの運営をしていきたい。 継続発展していくためには、イルミネーションの設置、撤去、夜店の運営などに協力する仲間集めが直近の課題である。

事業プラン名		地域防災人材育成プログラム
九共大	担当者	所長　山田　明
	所　属	地域連携推進センター
連携機関	機関名	浅川台小松自治区会、浅川まちづくり協議会
	責任者	会長、事務局長
事業実施日・回数		令和 6 年 9 月 24 日（火）
実施場所		九州共立大学自由ケ丘会館　J 304 教室
事業対象者･参加人数		自治区会関係者 8 人、本学学生 12 人、本学教職員 5 人、外部講師 1 人
経　　費		地域連携推進センター経常運営費(消耗品購入)
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 自分の安全は自分で守るのが防災の基本とされており、災害時に身を守るために日頃から身の回りの備えを行い、発災の直後においては、避難所開設などを協働し行うために、地域や職場の人たちと協力して備えを進めることが求められている。これら地域の防災活動に向き合うため、地域社会の防災に資する人材の育成を目的として、地域防災人材育成プログラムを実施するものである。 **2．実績** プログラムにおいては、昨年度と同様に総括テーマとして「地域・家庭の防災力向上を目指して」を設定し、発災に伴う避難所運営に係る講習を実技も含め実施した。講習は二部構成とし、第一部では外部講師を招へいし、防災士の立場から、避難所運営に係る過去の具体例、また、事例に基づく運営時における課題点等の講話があった。第二部の前半においては、本学教員の自らの体験に基づく東日本大震災における避難所運営について報告があった。後半においては、実践編として、講習会場内にテントを持ち込み、参加者全員による組み立て・収納の実技を行うとともに、簡易な器材を用いて炊飯を体験した。 **3．効果** プログラムにおいては、自助活動･共助活動に対し意識を高めることを目的として構成されており、特に、外部参加者の自治会会長をはじめとする近隣地域住民の方々にとって、改めて防災･減災への意識が高まっている。 また、実施後のアンケートからも、本学学生を含めた地域コミュニティの重要性など、今後の地域防災人材育成プログラム内容に資する意見を数多く得られた。
学生の声		プログラム開催にあたり、キーワードとして「避難所運営」を掲げ、近隣地域の住民の方々の積極的な参加を促した。このことから、参加の地域住民の方々より、「自宅での災害への備え」「避難行動」「地域での災害への備え」「日頃からの交流」「インフラ復旧の遅さへの備え」について、具体的な行動につながったとの報告を受けている。
今後の改善内容及び展開		本学の記念館（体育館）は災害時における避難所に指定されており、大規模災害では、八幡西区役所における避難所の開設が予定される。また、避難の対象となるのは、近隣住民の方々に加え、登校している学生も含まれることになる。 今後、被災した時に備えて本学に期待される事項のうち、災害前から近隣住民の方々と本学学生との交流の機会の創出が求められていることから、次年度以降のプログラムの構成にあたっては、主体的かつ能動的に行動する契機となる内容であることに加え、本学学生のさらなる参加を促し、近隣住民の方々と合わせてコミュニティの形成を図れるプログラムとする。

事業プラン名		民産官学協働型･地域活性化プロジェクト
九共大	担当者	後藤浩士・諸賀加奈
	所　属	経済学部
連携機関	機関名	西部ガス株式会社　営業本部　都市リビング開発部
	責任者	まちづくりソリューショングループマネージャー　本田卓也　様
事業実施日・回数		9 月 12 日、11 月 16 日、2 月 2 日、3 月 2 日
実施場所		「cocokara ひのさと」「ひのさと 48」「日の里地区商業店舗」など
事業対象者･参加人数		日の里地区住民・店舗、参加者累計約 50 人
経　　費		20 万円
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 9 月 12 日　「ひのさと 48」にて西部ガス営業本部都市リビング開発部まちづくりソリューショングループから、これまでの日の里地区の再開発に関する説明を受け意見交換を行った。当日、東郷駅日の里口の「cocokara ひのさと」から「ひのさと 48」までの店舗の調査を行った。 11 月 16 日　日の里地区の商業店舗・公共施設および周辺住民へのヒアリング調査を行った（地域のニーズとシーズの確認）。調査結果を報告書にまとめるとともに、各店舗の店舗プロデュース及び商品・サービスの企画案について話し合い、原案を整理した（エリアマーケティングと販売プロモーション戦略の検討）。これらの原案に基づきワークショップを開催し、小中学生、高齢者、大学生の三者による民産官学協働の企画を練り上げていく作業を実施する準備作業を進めた。 2 月 2 日　日の里東小学校、日の里西小学校、日の里小学校、日の里地区コミセン、日の里地区まちづくり委員会委員長、副委員長、宗像市議会議員への呼びかけを行った。 3 月 2 日　ワークショップの内容と掲示物をブラッシュアップし、参加賞・表彰状なども準備した。 **2．実績** 9 月の西部ガスとのコラボレーション企画、11 月の住民や店舗を対象としたアンケート調査を実施し、地域再生の過程にある日の里地区の強みと弱みを「見える化」することができた。その上で、各店舗・施設のプロデュース案を 2・3 年生で話し合い、掲示物（ポスター）にまとめた。2 月、3 月は小中学生、大学生、高齢者による多世代間交流のワークショップの企画を行なった。まちづくりに関する政策形成過程をミニチュアモデルで実施する案を準備し、当日の審査員に宗像市議会議員も加わっていただく構成とした。日の里地区まちづくり委員会には 2 年連続で全面的な協力をいただいた。 **3．効果** 継続的に取り組むことで、私たちのプロジェクトチームの活動の認知度が上がり、住民の皆様による協力体制が構築された。参加学生には日の里地区出身者はいなかったが、訪問する度に親近感が湧き、中長期にわたるまちづくりのビジョンを思い描くことができた。今回のプロジェクトの集大成ともいえる 2・3 月のワークショップは気候等を理由として実施を見送らざるを得なかったが、入念な準備の過程で学生は地域政策の貴重な事例を学ぶことができた。
学生の声		参加者の多くが地方公務員を志望しているため、将来を見据えた良い経験になった。日の里地区に愛着が生まれた。
今後の改善内容及び展開		1 年目の改善点をほぼ改善することに成功した。しかし、高齢者と小中学生の世代間交流が中心であるため、気候や流感状況を十分把握して開催する必要がある。これに大学生の授業日や帰省時期、部活の練習日、アルバイトの日程を考慮し、実施日を調整する必要がある。今年度も夏は猛暑、冬は厳冬であったため、高齢者や生徒・児童達には酷な状況であった。

事業プラン名		夢と情熱の 2 年計画：「第 1 回 MUNAKATATHLON へ」
九共大	担当者	森部　昌広
	所　属	経済学部　経済･経営学科
連携機関	機関名	宗像市役所
	責任者	経営企画課・産業政策課
事業実施日・回数		2024 年 5 月～2025 年 3 月
実施場所		むなたびラボ
事業対象者･参加人数		事業対象者：宗像市民　市外住民 参加人数：50 人（参加者）10 人（大学生・教員）
経　　費		宗像市（まちの課題解決プロジェクト）助成金
目的・内容等及び実績と効果		**1．目的・内容等** 　このプロジェクトの最大の目的は「スポーツ×観光」を通じた地域活性化と宗像市のブランドアップである。本プランにおいては、宗像市の地域指定課題として挙げられている「自転車を使った観光促進」に目を向け、市内の広大な自然環境や数々の観光スポットを利用したサイクリングイベントの開催を企画した。 　また、サイクリングイベントでは、宗像市民だけでなく、地域外からの来訪者にも宗像市の魅力の再発見と体験機会の創出を図った。 **2．実績** 　レンタル自転車、スタッフの確保など、たくさんの方々からのご支援もありイベント当日に向けて万全の状態ではあったが、当日の天候不良により参加者の安全面を最大限に考慮した結果、中止という判断に至った。 **3．効果** 　イベント開催において一番の懸念点であった集客に関しても、募集締切前に定員の 50 名に達し、さらに定員以上の応募があった。あいにく天候不良によりイベントは中止となったが、応募者からの暖かい声援を多数いただき、宗像市のサイクリング事業には、まだ無限大の可能性が秘められていると実感した。地域の指定課題となっていた「自転車を使った観光促進」は、いずれは宗像市の魅力あるプロジェクトとして定着していくと思われる。
学生の声		[プロジェクトリーダーの言葉] 　約 1 年間にわたる準備期間では、ルート設計や現地調査、飲食店との交渉、広報活動など初めての経験ばかりであったが、多くの学びと達成感を感じることができた。 　イベントは残念ながら天候不良により中止となったが、地域の方々や関係者の皆様のご協力があったからこそ、ここまで形にすることができた。この準備期間で得られた地域とのつながりやチームでの共同経験は、プロジェクト参加者にとって大きな財産となっている。今後もこのプロジェクトの経験を活かし、新たな挑戦に取り組みたい。
今後の改善内容及び展開		今回は 1 日限りのイベント開催をプロジェクトとして提案し取り組んだが、天候不良によりイベントは中止となった。このことから天候に左右されるプロジェクトは、「まちの課題解決プロジェクト」には向いていないと思われる。この度の経験から一つ工夫するならば、少人数かつ一回のイベントが低予算にて実施できるようなプチイベントを、プロジェクト期間内に複数回にわたり企画することで、イベントの未実施を避けることができると思う。 　今回の集客にあたっては、宗像市の小中学校を通じてチラシを配布した。その結果、子どもたちがイベントに興味を持つことで、保護者の関心も高まり家族での参加につながるケースが多く見られたことから、他のイベントにおいても、子どもをきっかけに保護者も巻き込むことで効果的に参加者を増やすことが考えられる。

事業プラン名		宗像市「大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト」 「地域共生社会へのパラダイムシフト」 人と人が繋げる地域の防災～子ども真ん中プロジェクト～
九共大	担当者	顧問　木村美奈子　・学生統括　佐藤真愛・髙木泰雅
	所　属	SDGs チャレンジアクション研究会・経済・経営学科ワークショップ受講生
連携機関	機関名	宗像市
	責任者	経営企画課　人づくり推進係
事業実施日・回数		2024 年 6 月 30 日～2025 年 3 月 22 日
実施場所		宗像市立東郷小学校　ほか
事業対象者･参加人数		事業対象者：赤間市立東郷小学校、東郷小学校学童保育 参加人数：21 名
経　　費		宗像市助成金 20 万円
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 　地球温暖化の進行に連れて、自然災害の発生頻度も増加傾向にある。近年福岡県内各地において様々な災害に見舞われている。避けることはできない自然災害に対して、被災者ゼロのまち「宗像市」をつくりたいと考え、災害に対する予備知識や心構えを学ぶことにより、自助・共助の力を養成する。 　本年度のプロジェクトは、ソフトバンク株式会社（CSR 本部）と宗像市の産官学連携事業として昨年度に続き、市民への防災減災意識の向上を狙い防災教育を行う。災害は「地域」で起きていることに着目し、「地域」の最小組織である「家庭」にフォーカスし、家庭の中に存在する「子ども」を対象に、子ども向けの「遊び」と「防災」を掛け合わせた防災教育「あそぼうさい」を実施した。 **２．実績** 12/20 対象：東郷小学校 3 年生　120 名 、3/22 対象：東郷小学校学童保育　20 名 　対象の小学校近隣に起きうる自然災害について事前に聞き取り調査を実施。 　聞き取り調査の内容から、「あそぼうさい」の実施プログラムの構成を行った。実施プログラムは、オープニングから始め、防災教育コンテンツは好きっちゃ北九州の既存コンテンツに加え、本プロジェクトのために経済・経営学科の学生たちや部メンバーが考案したオリジナルコンテンツを披露し実施した。今回は VR カメラを用いた災害体験を新たに試行した。 **３．効果** 　実施後のアンケート（有効回答数 109）を分析すると、子どもたちが災害に対して危機感を感じ、常日頃から防災に対する備えが必要であることを理解していた。「遊び」と「防災」を掛け合わせた防災教育「あそぼうさい」の体験から、遊びながら防災を学ぶことができることについての新奇性を楽しみながら、災害に対する防災知識や対策を学んでくれたようである。特に今回は VR 映像によるリアルな災害体験は、日ごろ行われている避難訓練等では体験できない非日常感と没入感により、災害に対する怖さを体験し、防災に対する意識向上に効果があった。
学生の声		今年のあそぼうさいでは新たに VR 映像を使った防災教育を実施し、大地震を知らない小学生たちに疑似体験を通じて災害時の冷静な対応力を養うことを目指しました。他のブースでも災害後の行動を楽しく学ぶ姿が見られ、アンケートでも「楽しく学べた」「印象に残った」「災害に備えたい」と好評でした。被災者ゼロを目指し、今後も心に残る楽しい防災教育を続けていきます。
今後の改善内容及び展開		今年度は、日本スポーツ協会の推奨する ACP（アクティブチャイルドプログラム）の要素を取り入れた活動性の高い防災コンテンツを開発・実施し、子どもたちの関心を引きつけつつ災害時の判断力を育んだ。新たに導入した VR 体験も好評であった。今回は YouTube の既存の映像を使ったが、今後は、学生自身に地域に合わせたオリジナル映像を作成することにチャレンジさせ、その活用を目指したい。反省点として、地域防災会議が開催できなかったため、次年度はコミュニティセンターを活用して実施予定したい。また、宗像市の学童保育からの要望もあり、運営事業者との連携による学童保育での継続的、定期的なあそぼうさいの実施にも取り組んでいきたい。

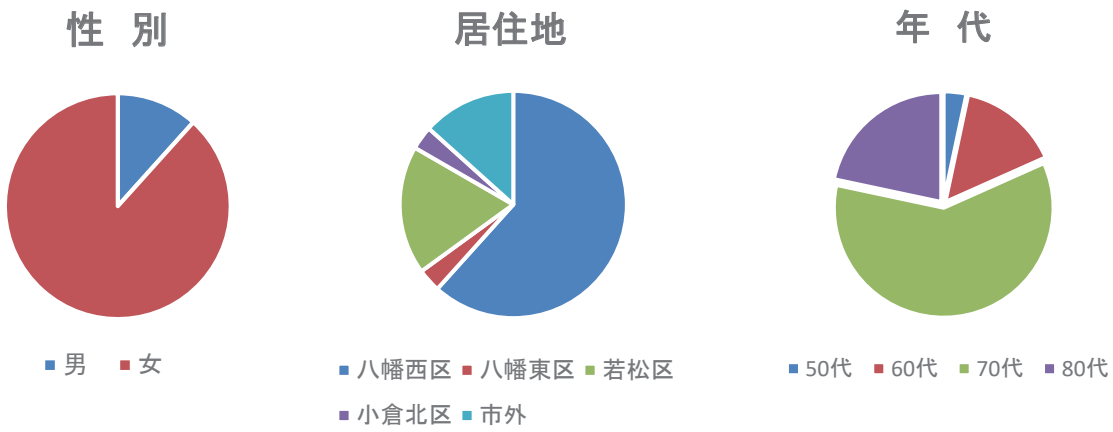
事業プラン名		宗像市「大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト」 「遊び」と「文化」の融合による　新たなスポーツ・運動のきっかけづくり
九共大	担当者	松﨑　淳
	所　属	スポーツ学部
連携機関	機関名	宗像市
	責任者	経営企画課　人づくり推進係
事業実施日・回数		2024 年 7 月～2025 年 3 月（全５回）
実施場所		宗像ユリックス、グローバルアリーナ
事業対象者･参加人数		事業対象者：宗像市民 参加人数：410 名（市民）、11 名（大学生・教員）
経　　費		宗像市（大学生の力によるまちの課題解決プロジェクト）助成金
目的・内容等及び実績と効果		**１．目的・内容等** 宗像市では、スポーツ実施率の低さや地域住民の運動機会の減少、情報発信手段の不足、推進人材の不足といった課題がある。松﨑ゼミナール 2 期生は、まちプロ 2023 の振り返りと宗像市のスポーツ関連事業の分析を通じて、同市の取り組みが特定種目に偏っている現状を明らかにした。これを受け、今後は青少年から高齢者まで幅広い層を対象に、誰もが参加しやすい「遊び」と「文化」を取り入れた活動が求められると提言。そこでゼミ生は、オープンスペースを活用した等身大オセロの体験型プログラムを展開し、身体と頭を同時に使う運動機会を創出。また、「スポーツで笑顔・元気あふれるまちづくり」の実現に向けて、運動やスポーツの様子を捉えたフォトコンテストや、スポーツ・健康をテーマにした川柳コンテストを開催し、市民の関心と参加を促した。 **２．実績** 松﨑ゼミナール 2 期生は、宗像市のスポーツ参加率の低さや無関心層の存在を踏まえ、「遊び」と「文化」を融合させた新たなスポーツ振興プロジェクトを実施した。等身大オセロを用いた体験型プログラムでは、誰もが楽しめる非競技的な運動機会を提供し、参加者から高い満足度を得た。また、フォトコンテストや川柳コンテストを通じて、地域住民の創造的な関与を促し、スポーツに対する関心と健康意識の向上に寄与した。こうした活動は今後の持続的な地域スポーツ振興にもつながるものである。 **３．効果** 本プロジェクトは、宗像市のスポーツ無関心層に対する新たなアプローチとして、「遊び」と「文化」を融合した活動を展開することで、地域住民の参加意欲と関心を高める効果を上げた。等身大オセロなどの非競技的運動は参加のハードルを下げ、フォト・川柳コンテストは多様な住民層に表現の機会を提供した。参加者からは満足度が高く、特に子どもには「考える力」や「コミュニケーション力」の育成にもつながった。今後の継続的発展が期待される。
学生の声		本プロジェクトに参加した松﨑ゼミナール 2 期生からは、「地域の課題を自らの手で分析し、解決策を形にする貴重な経験となった」「運動が苦手な人や関心のない人にも楽しんでもらえる仕掛けづくりの難しさとやりがいを実感した」といった声が寄せられた。 特に、等身大オセロの企画・運営に関わった学生は、「実際に地域住民と関わることで、想像していた以上に多様なニーズがあることに気づき、自分の視野が広がった」と振り返っている。また、フォトコンテストや川柳コンテストの審査や広報を担当した学生からは、「文化を通じて地域とつながる感覚が新鮮だった」「スポーツ振興の手法に多様性があることを学んだ」との意見もあり、学生一人ひとりにとって実践的な学びの場となった。
今後の改善内容及び展開		今後の改善点として、まず参加者数の確保が重要な課題である。今回のプロジェクトでは、魅力ある内容でありながら、周知不足により参加が限定的であった。今後は、SNS や地域メディア、学校や公共施設での広報活動を強化し、早期かつ継続的な情報発信を行う必要がある。また、学生の参加意欲を高めるために、大学の教育プログラムと連携し、活動を単位認定や成績評価に結び付ける仕組みの導入も有効である。今後の展開としては、世代やライフスタイルに応じた多様なプログラムを企画し、シニア層向けの軽運動や親子で楽しめる体験型イベントなど、地域住民の多様なニーズに応える形でスポーツ・文化活動を拡充していくことで、宗像市全体のスポーツ振興をより持続可能なものにしていきたい。

2024年度【前期・後期】公開講座実績報告

2024年度に地域連携推進センターで開催された講座は、前期3講座、後期3講座の合計6講座でした。
講座の延べ人数は 626名、受講生は 60名でした。

【公開講座】

講座名	実施期間・回数	受講生数			担当講師
		男	女	合計	
美しい韓国語（前期）	5/7～7/23　火曜日 10：00～11：30　12回	3	5	8	朴　淑子
美しい韓国語（後期）	10/1～1/28　火曜日 10：00～11：30　16回	2	5	7	
歌う喜び「世界の名曲」（前期）	5/15～7/17　水曜日 13：30～15：00　6回	1	9	10	八代　眞知子
歌う喜び「世界の名曲」（後期）	10/2～1/22　水曜日 13：30～15：00　8回	1	8	9	
書道技法講座（前期）	5/10～7/26　金曜日 13：05～14：35　10回	0	13	13	九州女子大学 古木　誠彦
書道技法講座（後期）	10/11～1/31　金曜日 13：05～14：35　12回	0	13	13	
公開講座　計		7	53	60	



＊受講生アンケート＊

・授業内容はもとより、韓国の文化など先生の話がとても興味深くて、楽しい授業です。
・いつも楽しく分かりやすい説明をしていただいています。日本語と韓国語の特徴が、よく分かります。
　時には、いつも使っている日本語について改めての気づきもあります。
・いつも先生の伴奏でお仲間と楽しく歌わせて頂いています。
・日本は勿論、世界の名曲を限られた期間の中で、沢山教えていただきました。又、季節毎の歌も楽しみました。
・大学の公開講座とても勉強になります。学問や技術、経験等を学ぶことに生き甲斐を感じます。
・中国の書、日本の書の歴史を教えていただけるのは大変ありがたく思っています。高齢になっても勉強が出来る喜びを感じております。
・貴重な資料を見させて頂き、通常体験出来ない体験をさせて頂いています。
・講義では、いつも資料を配布していただき、分かりやすくていねいに教えていただいています。その日の課題も、興味深く取り組めるように毎回準備していただき、１人１人の作品の添削や助言をいただいています。
・色々と書法を学べ、とても楽しく受講できました。漢字かなととても奥深く感じました。

九州共立大学地域連携推進センター
2024年【前期】
公開講座開講一覧

美しい韓国語 韓国のドラマや旅行を楽しもう	
期間：5月7日～7月23日	
講師	朴　淑子
日程	5月 7日・14日・21日・28日 6月 4日・11日・18日・25日 7月 2日・9日・16日・23日
時間	10時00分～11時30分
受講料	12,000円
定員	10名

歌う喜び「世界の名曲」 日本や世界の歌を味わい、表現しよう	
期間：5月15日～7月17日	
講師	八代　眞知子
日程	5月15日・29日 6月 5日・19日 7月 3日・17日
時間	13時30分～15時00分
受講料	6,000円
定員	20名

書道技法講座 日本の書に挑戦	
期間：5月10日～7月26日	
講師	古木　誠彦
日程	5月10日・17日・24日・31日 6月 7日・21日・28日 7月 5日・12日・26日
時間	13時05分～14時35分
受講料	10,000円
定員	20名

2024年【後期】
公開講座開講一覧

美しい韓国語 韓国のドラマや旅行を楽しもう	
期間10月1日～1月28日	
講師	朴　淑子
日程	10月 1日・ 8日・15日・22日・29日 11月 5日・19日・26日 12月 3日・10日・17日・24日 1月 7日・14日・21日・28日
時間	10時00分～11時30分
受講料	16,000円
定員	10名

歌う喜び「世界の名曲」 日本や世界の歌を味わい、表現しよう	
期間：10月2日～1月22日	
講師	八代　眞知子
日程	10月 2日・16日 11月 6日・20日 12月 4日・18日 1月 8日・22日
時間	13時30分～15時00分
受講料	8,000円
定員	20名

書道技法講座 日本の書に挑戦	
期間：10月11日～1月31日	
講師	古木　誠彦
日程	10月11日・18日 11月 8日・15日・22日・29日 12月13日・20日 1月10日・17日・24日・31日
時間	13時05分～14時35分
受講料	12,000円
定員	20名

2024年度【前期・後期】市民カレッジ実績報告

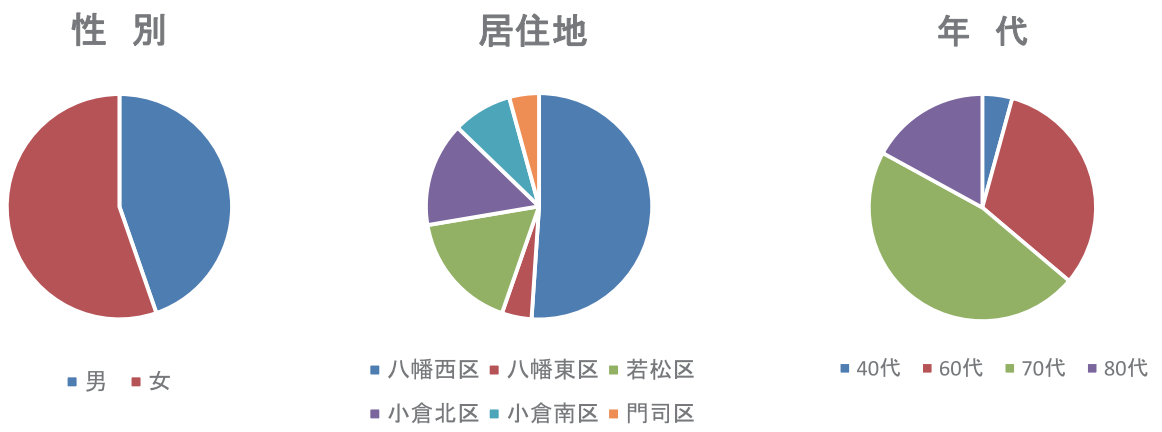
北九州市立生涯学習総合センターと連携して行う事業で、市民の高度で専門的な学習ニーズに対応した学習機会を提供し、自己実現の促進、地域社会の活動向上及び生涯学習社会を担う人材の育成を図るために行う講座です。2024年度は、47名（男21名・女26名）の受講生数でした。

【市民カレッジ】

講座名	実施期間・回数	受講生数			担当講師
		男	女	合計	
スポーツ吹矢で免疫力を高めよう！(前期)	5/31～9/27　金曜日 10：00～11：30　10回※１	5	8	13	九州共立大学 名誉教授 信田　よしの
スポーツ吹矢で免疫力を高めよう！(後期)	10/25～2/21　金曜日 13：00～14：30　10回※２	3	8	11	
数学総集編続編（前期）	6/3～7/1　　月曜日 13：00～15：00　5回	8	5	13	元九州共立大学 教授 江口　弘文
数学総集編続編（後期）	11/11～12/9　　月曜日 13：00～15：00　5回	5	5	10	
市民カレッジ　計		21	26	47	

※１）大学内計画休暇・台風のため中止となった２回分を、別日に延長して対応した。

※２）積雪のため中止となった２回分を、別日に延期して対応した。



＊受講生アンケート＊

・学生時代と違ってテストがなく、よい環境で学べることは、生活の充実につながりました。

・学びたかった微分、積分についてお話し頂けて面白かったです。講座回数はもっと多いと嬉しいですが、短く集中して学べるのも良かったです。

・私にとって未知の数学をわかりやすく、やさしく解説して下さり、楽しく受講させていただいております。次年度も楽しみにしています。

・健康維持を目的にしているので、週1回位はしたい。

・新しいお友達もできて先生方のご指導も良くて、とても楽しい講座でした。

・指導の先生方の的確なアドバイスで技術も向上し、毎回レッスンを楽しみにしています。これからも生涯スポーツとして楽しんでいきたいです。

九州共立大学地域連携推進センター
2024年【前期】
市民カレッジ開講一覧

スポーツ吹矢で免疫力を高めよう！	
期間：5月31日～9月27日	
講師	信田　よしの
日程	5月31日
	6月14日・28日
	7月12日・26日
	8月23日
	9月13日(※)・27日(※)
時間	10時00分～11時30分
受講料	10,000円＋傷害保険料
定員	16名

数学総集編続編	
期間：6月3日～7月1日	
講師	江口　弘文
日程	6月3日・10日・17日・24日
	7月1日
時間	13時00分～15時00分
受講料	2,500円
定員	20名

（※）大学内計画休暇･台風のため中止となった2回分を、別日に延長して対応した。

2024年【後期】
市民カレッジ開講一覧

スポーツ吹矢で免疫力を高めよう！	
期間10月25日～2月21日	
講師	信田　よしの
日程	10月25日
	11月 8日・22日
	12月 6日・20日
	1月17日(※)・24日(※)
	2月14日・21日(※)
時間	13時00分～14時30分
受講料	10,000円＋傷害保険料
定員	16名

数学総集編続編	
期間：11月11日～12月9日	
講師	江口　弘文
日程	11月11日・18日・25日
	12月 2日・9日
時間	13時00分～15時00分
受講料	2,500円
定員	20名

（※）積雪のため中止となった2回分を、別日に延期して対応した。

九州共立大学
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY

2024年度　九州共立大学　地域連携推進センター報告書
発行　令和７年７月

学校法人福原学園
九州共立大学　地域連携推進センター

〒807-8585　北九州市八幡西区自由ケ丘1-8
TEL&FAX　093-693-3255　E-mail　renkei-2015@kyukyo-u.ac.jp